

# 『三代実録』の薨卒記事

野口 武司

はじめに

『三代実録』は、いわゆる六国史の中で最も後時に完成奏上されたという事情もあって、それに先行する五国史に較べてみた場合、記載内容の点で一段の豊富さと詳審さとを加えるとともに、編纂技法の面でも種々の工夫を凝し、新機軸を出していると言える。

本稿では、斯様な事柄の一端を、特に同書の薨卒記事の検討を通して具体的に明らかにしてみようと思う。

## 一 所生子の記載

薨卒当事者の所生子の名を挙げ、あるいは、その所生子の事績にまで言及する事例（以下、これをAと仮称する。）について検討を加えてみよう。

先ず、『続日本紀』以下『三代実録』までの五国史

（六国史中、諸種の点で、他余の国史と内容や性格を異にする『日本書紀』は除外してある。特に断わらずに、単に五国史といった場合は、すべてこの意である。以下同様。）にみる、

そうした事例を次下の論述に必要な範囲内において掲記する。

『続日本紀』

①、内命婦正三位皇太后崩……命婦皇后之母也（天平5・1・11条）

②、天平正仁正皇太后崩……生高野天皇及皇太子（天平宝字4・6・7条）

③、夫人正三位皇太后養橘宿禰刀自薨……生安積親王。年未弱冠。天平十六年薨。又生井上内親王。

（天平宝字6・10・14条）

④、右大臣從一位藤原朝臣豐成薨……感宝元年拜右大臣。時其弟大納言仲滿。執政專權。勢傾大臣。大臣天資弘厚。時望攸歸。仲滿每欲中傷。未得其隙。大臣第三子乙繩。平生与橘奈良麻呂相善。由是奈良麻呂等事覺之日。仲滿誣以党逆。左遷日向掾。促令之官。而左降大臣為大宰員外帥。仲滿謀反伏誅。即日復

本官（天平神護1・11・27条）

⑤、散位從四位下久米連若女卒。贈右大臣從二位藤原朝臣百川之母也（宝龜11・6・26条）

⑥、三品能登内親王薨……生五百井女王。五百枝王（天心1・2・17条）

⑦、尚藏兼尚侍從三位阿倍朝臣古美奈薨……適内大臣贈從一位藤原朝臣良繼生女。即是皇后也（延暦3・10・28

条）

⑧、中納言從三位大伴宿禰家持死……死後廿餘日。其屍未葬。大伴繼人。竹良等殺種繼。事發覺下獄。案驗之。事連家持等。由是追除名。其息永主等並処流焉（延暦4・8・28条）

⑨、尚縫從三位藤原朝臣諸姉薨……適贈右大臣百川生女。是贈妃也（延暦5・6・29条）

⑩、夫人從三位藤原朝臣旅子薨……生大伴親王（延暦7・5・4条）

⑪、皇太后崩（延曆8・12・28条）葬於大枝山陵。皇太后姓和氏。諱新笠……生今上。早良親王。能登内親王（延曆9・1・15条）

⑫、皇后崩（延曆9・閏3・10条）葬於長岡山陵。皇后。姓藤原氏。諱乙牟漏……生皇太子。賀美能親王。高志内親王（延曆9・閏3・28条）

⑬、正五位上坂上大宿禰又子卒……生高津内親王（延曆9・7・21条）

### 『日本後紀』

⑭、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前国造和氣朝臣清麻呂薨……有六男三女。長子広世。起家補文章生……大学南辺以私宅置弘文院。藏内外經書数千卷。墾田卅町永充学新。以終父志焉（延曆18・2・21条）

⑮、三品高志内親王薨……配淳和天皇。生三品恒世親王。氏子。有子。貞子内親王（『日本紀略』大同4・5・7条）

⑯、散事從三位橘朝臣常子薨……皇統弥照天皇納之後宮有寵。生三品大宅内親王（『日本紀略』弘仁8・8・1条）

### 『続日本後紀』

⑰、女御從四位下藤原朝臣沢子卒……天皇納之。誕三皇子一皇女也宗康。時康。人康。新子是也。（承和6・6・30条）

### 『文德実録』

⑱、散事從四位下百濟王貴命卒……為女御。即是二品式部卿大宰帥忠良親王之母也（仁寿1・9・5条）

⑲、參議正四位下行宮内卿兼相摸守滋野朝臣貞主卒……長女繩子。心至和順。進退中規。仁明天皇殊加恩幸。生本康親王。時子内親王。柔子内親王。少女奥子頗有風儀。闔訓克脩。為天皇所幸。生惟彦親王。濃子内親王。

勝子内親王<sup>一</sup> (仁寿2・2・8条)

⑳、正三位源朝臣潔姫薨……太政大臣正一位藤原朝臣良房弱冠之時。天皇悅其風操超倫。殊勅嫁之。清和皇太后即其長女也 (齊衡3・6・25条)

㉑、權中納言兼左衛門督從二位藤原朝臣良薨……有子六人。第三子基經。今撰政右大臣也。基經幼少之日。敬愛異於諸子。古人有言。知子不如父。誠哉。少女高子。即今中宮也 (齊衡3・7・3条)

### 『三代実録』

㉒、大納言正三位兼行民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁薨……有子男八人。貞行。宗行。清行。興行。最知名。興行始舉秀才。对策及第 (貞觀1・4・23条)

㉓、從四位上行撰津守滋野朝臣貞雄卒……女從五位上岑子。文德天皇納之。誕二皇子二皇女 (貞觀1・12・22条)

㉔、從五位下守大判事兼行明法博士讃岐朝臣永直卒……長子時人伝父業。改姓和氣朝臣。少女為光孝天皇更衣。生源皇子旧鑒 (貞觀4・8是月条)

㉕、仁明天皇女御正三位藤原朝臣貞子薨……誕有一皇子二皇女。皇子者第八成康親王是也 (貞觀6・8・3条)

㉖、二品仲野親王薨……有男十四人。女十五人。茂世。輔世。季世。秀世。房世。当世。基世。潔世。実世。十世。在世。康世十二人爵為四位。十世。官至參議。惟世。利世一人。賜姓平朝臣並為五位。女諱班子。光孝天皇龍潛之日。納之藩邸。生朱雀太上天皇 (貞觀9・1・17条)

㉗、大納言正三位平朝臣高棟薨……有子男十七人。実雄。正範。季長。惟範四人最知名 (貞觀9・5・19条)

㉘、右大臣正二位藤原朝臣良相薨……有子。男女九人。長子常行。官至大納言。自有伝。次直方。忠方並以才行見称。忠方最工隸書 (貞觀9・10・10条)

②9、美濃權守從五位上滋野朝臣安城卒……良幹之父也（貞觀10・6・11條）

③0、左大臣正二位源朝臣信薨……子恭。平。有。三人並爵至四位焉（貞觀10・閏12・28條）

③1、參議從三位春澄朝臣善繩薨……昔者為文章博士之時。諸博士每各名家。更以相輕。短長在口。亦弟子異門。互有分爭。善繩謝遣門徒。恬退自守。終不為謗議所及……有子。男女四人。具瞻。魚水。並爵至五品。然无繼家風者。長女治子為正四位下典侍（貞觀12・2・19條）

③2、從四位上行右兵衛督兼相摸守藤原朝臣良尚卒……長子菅根篤學。經史百家畢該。為文章生。対策及第（元慶1・3・10條）

③3、淳和太皇太后崩……立后所生恒貞親王為皇太子（元慶3・3・23條）

③4、從四位下行信濃守橘朝臣良基卒……有子男十一人。第六子在公。嘗問治國之道。良基答曰。雖有百術。不如一清（仁和3・6・8條）

③5、散位從四位上文室朝臣卷雄卒……卷雄奏請被罷相摸守。任男一人外吏。詔依請。以男房典為近江少掾（仁和3・8・7條）

これにより、〈A〉は『続日本紀』に三例、『日本後紀』に三例、『続日本後紀』に一例、『文徳実録』に四例、『三代実録』に一四例存し、五国史中、『三代実録』が最も多く、それに『続日本紀』『文徳実録』『日本後紀』『続日本後紀』の順で続いていることが分かる。

勿論、これは、単にそうした〈A〉が五国史の各々に如何ように存するか、その多寡を機械的・表面的に眺め廻して得られた結果に過ぎず、そこには、それら五国史の各々に収載する薨卒記事合計数（以下、これを〈B〉と仮称する）に対する上述の〈A〉の比率を各史書毎に各々比較検討するという見地からの考察がなされていないために、そうしたことのみでは、決して

各五国史における真の意味で公平、且つ公正な $\wedge A \vee$ の多寡・優劣の度合を計ることが出来ないのである。そこで、そうしたことの可能なファクターを導入して件の問題につき検討を加えてみよう。

〈表一〉に示すように、各五国史における $\wedge B \vee$ は、『続日本紀』に三〇二例、『日本後紀』に一七九例、『続日本後紀』に九五例、『文徳実録』に八〇例、『三代実録』に一八七例存し、 $\wedge A \vee$ の $\wedge B \vee$ に対する百分比は、『続日本紀』が約四・三%、『日本後紀』が約一・一二%、『続日本後紀』が約一・〇五%、『文徳実録』が五%、『三代実録』が約七・五%となる。従って $\wedge A \vee$ の $\wedge B \vee$ に対する百分比が最も優越するのは『三代実録』であり、それに『文徳実録』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』の順で続き、件の百分比を考慮外においた先の表面的な観察結果である『続日本紀』↓『文徳実録』の順次が『文徳実録』↓『続日本紀』というように正に逆転していることや、件の百分比如

〈表一〉

諸項目	五国史				
	続日本紀	日本後紀	続日本後紀	文徳実録	三代実録
$\frac{\wedge A \vee}{\wedge B \vee} \times 100$	一三	二	一	四	一四
$\frac{\wedge B \vee}{\wedge C \vee} \times 100$	三〇二	一七九	九五	八〇	一八七
$\frac{\wedge C \vee}{\wedge B \vee}$	三	一	一	一	一一
$\frac{\wedge A \vee}{\wedge B \vee} \times 100$	約四・三%	約一・一二%	約一・〇五%	五%	約七・五%
$\frac{\wedge C \vee}{\wedge B \vee} \times 100$	約一・〇%	約〇・五六%		約一・三%	約五・九%

何を考慮して始めて、『三代実録』の、他余の四国史、取り分け『続日本紀』に対する〈A〉の優越度・卓越度の高いことを瞭然たらしめうるのである。

さらに、先掲の薨卒記事における薨卒当事者の所生子が天皇・皇子女であったり、皇后・中宮・女御等として天皇に聘されたり、その恩幸を忝なくして皇子女を儲けたりした者であれば、斯うした者は、どちらかと言えば、事の性格上、国史に登載され易いので、ここでは、斯様な事例を一切除外して、それ以外の残余の事例（以下、これを〈C〉と仮称する。）が各五国史に如何ように存するかを調査してみるに、先掲〈表一〉により、『続日本紀』に三例、『日本後紀』に一例、『続日本後紀』にナシ、『文徳実録』に一例、『三代実録』に二例存し、そして、これらが各五国史の〈B〉に占める割合は、『続日本紀』が約一・〇%、『日本後紀』が約〇・五六%、『続日本後紀』が〇%、『文徳実録』が約一・三%、『三代実録』が約五・九%となる。故に、先に触れた〈A〉の〈B〉に占める百分比におけるよりも、後に述べた〈C〉の〈B〉に占める百分比において、『三代実録』の、他余の四国史に対する一層極立った卓越性・優越性を認知しうるのである。而して斯うした事柄の意味する攸について、次に考えてみよう。

五国史の薨卒記事所見の〈C〉を具体的に検討してみるに、先ず『続日本紀』の場合、④、⑤、⑧三例のうち二例は、薨卒当事者が④の右大臣従一位、⑧の中納言従三位というように高位高官者である。しかも、これら二例に共通するのは、孰れの場合も某事変に関係することである。即ち④の場合、当事者たる右大臣豊成の声望を妬み、これを陥れんとしていた、その舎弟仲麻呂は、己の権勢の転覆を企図していた、例の橘奈良麻呂と件の豊成の第三子乙繩とが予てより昵懇の間柄に在ったのを一つの梃子として、遂に豊成の政治的生命を奪取して了ったという政変に関わるものである。従って当該薨卒記事所見の第三子乙繩なる人物は、飽く迄も、④の当事者たる豊成の政界からの失脚そのものを説明づけるために登場させられているに過ぎぬ存在とも解せられる。この意味で、当該記事における第三子乙繩は、決して、

その為人の有能性や傑出性、あるいは独自性や特殊性故に、記載されているとは言えない。それに、当該の本書後半部分（卷二一）の奉勅撰者にして、その編集事業に主導的な立場にあって、イニシアティブを発揮したとみられる藤原繼繩が、④の当事者たる豊成の子息であり、さらに、そこにみる第三子乙繩の実兄であることを考えるならば、繼繩は、己の父豊成が、その弟仲麻呂に政治的生命を奪取されたことについて、それは己（繼繩）の全く与り識らぬ故であり、己の弟たる、第三子乙繩に重大責任の一端がある旨を国史に明記しておきたい、との感懷を持していたであろうことなどを、件の④の記事から読み取り得るように思うのである。

次に⑧は、上述の④の場合に同様、某事変に関わるものであること既述の通りである。この⑧の場合は、例の種繼暗殺事件に連坐して、大伴一門の総帥とも謂うべき家持に、さらに、その子息たる永主等にもその累が及んだものとして、当該記事に永主等の名が登載されている訳である。因みに、家持の子息は、国史による限り、件の永主と、その兄古麻呂との二名知られるのみである。故に、その子息数は決して多くはなかったのであろう。斯くして、ここに永主の名が登載されているのは、やはり、彼の属性たる有能性や傑出性、あるいは独自性や特殊性に因るものではないのである。この点では、慥かに件の⑧にみる永主の場合も、先述の④の乙繩の採り上げられ方に共通するものがあると言えよう。

尚、⑧の当事者たる家持が薨でなく死と明記されているものの、その記事全体から受ける印象は、家持こそ件の種繼暗殺事変の主謀者なりと決めつけるような書き方ではなく、文字通り、彼に対する処置・処遇は、単に連坐に過ぎぬというような書き方であって、決して、彼自身に対し悪評を浴びせかけたり、批判がましい扱いは全くないと言ってよい。

これは、件の⑧の記事が、飽く迄も、誌し留めておいても何ら差し支えない範囲における事実関係のみの記述に終始しているからに外ならない。しかしながら、斯うした一見さらっとした簡略で、これといった何の変哲もなく、巧む故のないように見受けられる記事にも、同書編集の勅命者たる桓武帝と、奉勅撰者たる繼繩との公私（百濟明信が繼繩の室乙數の生母で、同帝後宮の尚侍）



両面に互る関係や、継縄と家持との私的（家持の妹が継縄の室で、真島を生む）関係などからみて、実は、股肱の臣たる種継を、暗殺によって喪失した同帝の落胆、悲愴、殺害者に対する憤怒、等々といったことへの配慮や、義兄家持及びその一門に対する同情、遺憾の心意、道義的責任の追究、困惑の情などといった心意・心情が錯綜し複雑に背在しているさまを看て取れるのである。

次に⑤であるが、これは、既述の④や⑧とかなり趣を異にするものと言える。即ち⑤の当事者たる散位從四位下久米連若女の場合は、その帶する位階の面で、先述の④や⑧の当事者に比して遥かに低位低級の官人である。しかし、この人物は、宇合の室となり、百川を産んだことにその最大の存在意義が認められているのである。この点は、⑤の記事それ自体がよく示していると言えよう。

周知のように、称徳天皇崩御後において、数々の奇計・奇策を以て白壁王（後の光仁帝）の立太子、尋いで即位、さらにその子山部親王（後の桓武帝）の擁立、立太子、続いて即位を成就せしめるに最も肝胆を砕いた者の一人が藤原百川であり、そして、⑩からも知られるように、この百川の女旅子は、桓武帝の後宮に入って妃となり、大伴皇子（後の淳和帝）を産み、さらに件の百川に輔翼されつゝ擁立され給うた桓武帝が、本書の編纂事業の主宰者にして、しかも、その治世下の延暦十六年に、本書が完成奏上された事実を鑑みるならば、ここで採り上げている⑤の「百川之母也」なる記述の意味する攸が、如何なるものであるか、自づと諒解されよう。

以上、『続日本紀』における△○▽三例について検討してきたが、それらは孰れも本書の後半部分の奉勅撰者たる藤原継縄や、本書の編纂事業主宰者であり、しかも、その完成奏上時の帝たる桓武天皇やの、個人的な意向ないし、それらとのかなり深い関わり合いの下に記されており、尠なくもそう解することにより、当該事例の意味する攸を、よりよく理会しうるのである。

次に『日本後紀』の場合について考えてみよう。既述の如く、同書所見の△C△は、⑭の一例あるのみである。しかも、この事例は、①、同書の所載薨卒記事中、最も長大なものである。②、贈位(正三位)を以て記載されている(極位は点で、極めて特異なものである。このうち、③に関して言えば、薨卒記事において、当事者の位階を贈位で誌すのは、五国史所見の薨卒記事合計数八四三例中、僅々二例という極めて特異な存在として注目される。因みに、そうしたいま一つの事例は何かと言えば、やはり、同書所見の「播磨守贈正四位下賀陽朝臣豊年卒伝」(弘仁6・6・27条)である。

斯様に、同書にあって和氣清麻呂の薨伝が、分量の点、記載形式の面で、諸他の事例に相異しているが、これは、彼が奈良朝時代の地方豪族出身者にして、公卿の座に列したほどの異数の存在(斯様な存在は、他に高麗福信と吉備真備に認められる。)ということにも因る

うが、それよりも寧ろ、当該薨伝中に、参議藤原朝臣百川が清麻呂の無比の忠烈を感んで、備後国封郷廿戸を割き、その配所大隅国に送り宛てたとあるように、清麻呂の為人たる、その純忠至誠さに感服し、その不遇な境涯に深き同情の誠を捧げた藤原百川が、実に本書の編纂事業において指導的立場にあり、終始、実務的な面でイニシアティブを執った藤原緒嗣の父に外ならず、その嗣子たる緒嗣が、実父百川の清麻呂評をそっくりそのまゝ受け継ぎ、そして、それが本書へ盛り込まれていると解する方が、遙かに事の真相に肉薄しうる見方ではないかと思うのである。事の序に、いま一つの特例たる賀陽朝臣豊年卒伝について、ここに尠しく付言しておこう。豊年の極位は、従四位下であった。原則として四位ライン以上の者を薨卒記事の一採録基準としている(同書収載の薨卒記事一七九例中、「外従五位下伊豫部家守卒伝」八延暦19・10・15条△「正五位下都宿禰腹赤卒伝」八天長2・7・7条△の二例のみ、その例外である。その

採録理由については、拙稿「『文徳実録』の薨卒記事良吏伝の検討——」(『林隆朗博士還暦記念論文集』参照)。

同書であれば、豊年の場合、その極位が、上述の如く従四位下というように、既に四位ラインに到達している訳であるから、何も贈位を以て記されずとも、彼がその極位を以て同書に載録されるべき条件は、十分に充たされていた筈である。それでは、彼が贈位を以て記されていることの理由について、一体如何ように解すべきかというに、これも上述の清麻呂の場合同様に、本書編纂事業の主宰者たる藤原朝臣緒嗣の意向に因るものとみ

て、先ず大過なからうと思う。即ち豊年の卒伝中に、彼が国典に精通し、国典に顕現されている精神を体現していた故に、彼をば国家の精華、国の誇りとして称賛する時人の言「天爵有餘。人爵不足」をそのまゝ載録している。これに対し、桓武天皇の外戚に連なる帰化系氏族（百濟國人）にして、同帝の格別なる恩顧を得て特進せられた和朝臣家麻呂をば、豊年とは逆に「人位有餘。天爵不足」（延暦23・4・27条）と論評している。斯様な点からみて、同書編纂事業の主宰者たる緒嗣は、才学・才幹・器量の有無や、蕃夷蔑視・国粹礼讃の精神やを基調として、その薨卒伝を記載ないし採録しているとみられる（拙稿「六国史の薨卒伝の記述内容について」『立正史学』第四七号参照。）ので、緒嗣のそうした基調精神に立脚した豊年評と、我が国家における君臣の分を明らかに、天津日嗣は必ず皇緒を建つべし、として皇統・国体の尊厳性をば、己の一命を賭してまで擁護した、先述の和氣清麻呂への評とは、その内実において、全く揆を一にし、相通ずるものと言えるのである。つまり緒嗣は、清麻呂・豊年両者をば余人と異なる類稀な国家の功臣・柱石と看做して崇敬し、仰慕して已まなかった。そして彼は、彼等の精神に心服し、そこに共鳴し合えるものを見出していた。而して斯様な緒嗣の清麻呂・豊年両者に対する心意・心情は、自づとそれら両者に対しての強い事績称揚ないし顕彰の精神へと連なり、それが延ては、それら両者の薨卒伝において、全く異例とも謂うべき記載様態、即ち贈位を以て記すという様態を採らしめることにもなったと考えられるのである。

次に『文徳実録』の②について検討してみよう。本書編纂の主導者たる基経は、その養父良房に較べれば、その性温厚にして学問好きであり、決して、奇を衒ひ、自己を顕示し、自己の名を歴史に残そうと躍起になって行動するような人物ではなかった（坂本太郎氏「藤原良房と基経」『古典と歴史』所収。）ではあるが、彼は、その実父長良の薨伝、即ち②においてのみ、それに反し、一度に堰を切ったかのように、自己を顕示して傍線部分（前掲史料参照）の如く記した。自分は、幼少時より他余の諸子と異なつて大器性を秘めており、それ故に、早々とそれを看破した実父長良は、自分を敬愛すること、他余の諸子に異なつた、という具合に、基経は自己の存在を強く主張するとともに、その実父長良の眼力の確かさ、識見の豊かさをも大い

に顕彰し、併せて、その妹高子が、現今清和帝の中宮に御座しますことを陳べ、以て同氏一族の栄華の拠ってきたる処にも言及している。この意味で、当条は、彼の基経にしてみれば、本書において、最も重要な意義を有ち、また、最も指摘しておきたい処でもあった、と言えよう。

尚、件の基経は、②において、その養父良房の人品の高尚さ・高邁さを称揚するとともに、義妹明子（文徳天皇皇后清和天皇母后）の存在にも触れており、これは、上述の②における中宮高子の場合に同様、藤原氏一門の繁栄・発展に貢献する処、多大である旨を寓意ないし暗示しているものとも解しえよう。

以上、『続日本紀』以下『文徳実録』までの四国史にみる〈C〉、即ち『続日本紀』の三例（④⑤⑧の三例）、『日本後紀』の一例（⑭の一例）、『文徳実録』の一例（⑲の一例）へは『続日本後紀』については該当事例ナシについて、各々逐一検討を加えてみたが、それらは孰れも各書の編纂主導者、即ち『続日本紀』（但し、同書後半部分）の藤原継縄、『日本後紀』の藤原緒嗣、『文徳実録』の藤原基経といった人々や、あるいは『続日本紀』の場合、同書編纂を主宰し、且つその完成奏上時の帝たる桓武天皇やの、個人的な意志・意向がかなり強く働き、そうしたこととの深い関わり合いのもとに記載ないし載録されている、とみられるのである。

最後に『三代実録』における〈C〉の一一事例（②②、②④、②⑥、③②、③④、③⑤の一一例）について考察してみよう。

これら一一事例における各薨卒当事者の位階を検すると、二品（位）が②⑥、②⑧、③⑦の三事例、三位が②②、②⑦、③①の三事例、四位が③②、③④、③⑤の三事例、五位が②④、②⑨の二事例というように、二品（位）から五位までに及び、位階別の事例数をみても、さほど偏りが認められない。この点から判じて、薨卒当事者の所生子名とその事績との記載は、必ずしも、薨卒当事者の位階の高下に拠るものでないことが分かる。とはいへ、薨卒記事にその名が記されている薨卒当事者の所生子の員数と、薨卒当事者の位階との間には、△表△に示す如き関係が認められるのである。即ち所生子の員数

＜表 二＞

史料番号	位階品位	所生子の員数
②②	三位	四人
②④	五位	一人
②⑥	二位	一人
②⑦	三位	一人
②⑧	二位	一人
②⑨	五位	一人
③①	二位	一人
③②	三位	一人
③④	四位	一人
③⑤	四位	一人

（備考） 所生子の員数は名を記している者に限る。

のである。

孰れにしても、『三代実録』の〈C〉事例における所生子は、学識・才行を以て称せられ、あるいは頭位頭官を得、あるいはまた、特殊技能の才を発揮し、各々有能な文人官僚として、それなりの名声を博した者が採り上げられているとみられるのである。この点では、先に触れた『続日本紀』の④、⑧の場合と相異なるが、『日本後紀』の⑭や、『文徳実録』の②①の場合と略々共通していると言える。

それでは、『三代実録』における〈C〉の場合、既述の『続日本紀』『日本後紀』『文徳実録』三書における〈C〉の場合がそうであったように、同書の当該記事と編纂事業に主導的役割を担った者（以下、これを「主導的役割者」と仮称する。）との間に、密接な関わり合いが認められるや否やというに、同書における〈C〉にあって、②⑦の平朝臣惟範、②⑧の藤原朝臣直方、③②の藤原朝臣菅根のうち、②⑦は「主導的役割者」の一人たる大蔵朝臣善行の門下生と称する者であり、②⑧、③②にしても、その大

が一人のみは、②④、②⑨、③②、③④、③⑤の場合であり、これらは、すべて四位・五位の卒去者の子弟に限られており、そして、所生子の員数が複数、しかも三名以上に及ぶのは、②②、②⑥、②⑦、②⑧、③①の場合であり、これらは、すべて二品（位）・三位の薨卒者の子弟に限られていることである。つまり、薨卒記事において、当該薨卒者の所生子名と、その事績とを記載するに際し、特にその前者については、薨卒当事者の位階が三品（位）以上の場合には三名以上、四位以下の場合是一名のみ、とする原則に拠ったとも受け取れるのであり、実際、そうした原則に基拠して当該記載が成されたものと解される

蔵善行と相通ずる關係にあつた人々である（『雜言』）ことや、件の善行が同書の他余の箇処において、その置かれた立場を利して、自己をかなり著しく顕している（坂本太郎氏『三代実録とその撰者』、『古典と歴史』所収）こと、などを介意すれば、そうしたこと、つまり、同書における当該記事と「主導的役割者」との密接な關係を認めうるようにも思えるのである。しかし、そのように想定して了う前に、①、国史（『続日本後紀』承和7・7・7条、同12・1・27条、同12・2・5条）に「公卿伝」、『令義解』（卷一職員令、式部省条）に「有功之家、進其家伝」（功臣家伝）なる語辞ないし記述を見得ること。②、本書の薨卒記事中に、撰者の立場からの批判らしき批判、論評らしき論評を殆ど見出しえぬこと。③、先に指摘した如く、本書の薨卒記事中、その薨卒当事者が、三（品）位以上と四位以下の場合において、その当事者の所生子の記述に、一定の原則が設けられているとみられること、の三点を総合して勘案するならば、「主導的役割者」の一人たる大蔵善行が、各家呈出の家伝や、各家呈出ないし公的記録としての公卿伝などを、本書編纂の一資料として用いるに際し、その識見・裁量に拠り、適宜に修正加除したであろうことを想察しうるけれども、その際に（C）の記述には、善行個人の意志ないし意向が、さほど強く顕わされていないとみるべきであろう。

尚、本書編纂事業の最高責任者たる藤原時平が、大蔵善行の門下生であり、その時平が師善行の七十賀の祝宴を主催した（『雜言』）ことや、既述の如く、善行に相通ずる關係にあつた藤原菅根が、殿上で菅原道真に打擲されたことより、菅根が反道真派勢力の一つの核を為すに至った（『江談抄』）こと、などを根拠にして、善行も、何時しか時平・道真両者間に存した政治勢力上の対立抗争の渦中に巻き込まれ、単に己が奉ずる学問・学芸上のみならず、政治面においても、時平に組して、反道真派に所属し、以て時平の道真排斥運動に一役買った、とするような見方（例えば、坂本太郎氏『六国史』三〇一、三〇二頁、同氏『古典と歴史』七二頁）も、あながち出来ないでもない。しかしながら、こうした見解は、やゝ行き過ぎの感を禁じ得ないのである。何故ならば、そうした見解は、もともと確たる根拠に裏付けられたものでなく、単なる情況判断の積み重ねに過ぎぬからである。仮に、若し、そうした見解を妥当なものとして、容認するとすれば、道真没後五年の延喜八（九〇八）年に、秀才科試験

に合格したその子息淳茂に対し、善行が新詩を呈して祝賀の意を表している（『扶桑集』卷九）ことを、何と説明するのであろうか。

容易に説明しえないのではなからうか。また、それよりも私は、本書における〈C〉の③従三位春澄朝臣善繩薨伝に、その人格を賞揚して傍波線部分（前掲史料参照）の如く記し、当時の学界において、善繩の独り超然として自立し、以て謗議

の圏外に在ったとしているが、このことこそ、次下に述べる如き理由により、そうした見解、つまり善行が時平の道真排斥運動に一役買ったとする見解の容易に成り立ち難いことを示して余りあるもののように思う。即ち件の記事が、いわゆる功臣家伝、あるいは公卿伝の孰れに拠るものであれ、そうした内容の記事をば、本書編纂事業の最高責任者にして、しかも、斯件の問題に大きく関わる藤原時平のみならず、本書編纂事業の「主導的役割者」の一人にして、斯件の問題の張本人たる善行までもが、そのまゝ黙認して本書に載録していること、それ自体、それら両者、取り分け善行が、善繩のそうした人格・為人に対して敬服し、以て共鳴共感する攸があったからに外ならぬ、と考えられるからである。

斯くして、仮令、善行はその置かれた立場を利して、本来公的なものであらねばならぬ筈の国史の記述に、忌わしくも、間々、私を顕わす所業を試みて、それを実践したという事実があったとしても、学問・学芸上のことのみならず、政治分野の面でも、時平と結託して道真と対立し、これを排斥するに際し、その一翼を担ったとするような捉え方は、尠しく行き過ぎで、穩当を欠く見解との謗りを免れぬように思う。善行は、飽く迄も儒者であり、本質的に政治家肌の人には成りきれなかったものであり、それは、「年満九十。猶有<sub>二</sub>壮容<sub>一</sub>。耳目聰明。行步輕健。家蓄<sub>二</sub>多婦<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>断<sub>二</sub>房室<sub>一</sub>。年八十七。生<sub>二</sub>一男兒<sub>一</sub>。延喜十七年。以<sub>二</sub>漢書<sub>一</sub>授<sub>二</sub>皇太子<sub>一</sub>。每朝侍講。無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>休暇<sub>一</sub>。天下無<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>歎異<sub>一</sub>。皆謂<sub>二</sub>之地仙<sub>一</sub>焉。」（『政事要略』卷九十五）などとあるように、兎も角、並外れた強靱な体力・氣力を以て学問・学芸面で多大の活躍を遂げはしたが、それに伴う令名の高さに引き替え、その官位の昇進は至って遅く、その門地の低さもあるけれど、それにしても、五位ラインへの昇叙が仁和二年、五六才の時であり、その晩年に漸く「爵至<sub>二</sub>四品<sub>一</sub>」ったという一事に徴しても察知せられる

ことである。

以上を要するに、本書、即ち『三代実録』における〈C〉には、『続日本紀』『日本後紀』『文徳実録』三書におけるそのように、撰者の意図ないし意向がさほど強く反映されているとは言えないのである。確かに、本書編纂の「主導的役割者」の一人たる善行は、〈C〉以外の個処で、かなり著しく自己を顕すことをしているとはいへ、件の〈C〉においては、飽く迄も、儒者としての識見・裁量に拠って、いわゆる功臣家伝ないし公卿伝などといった編纂資料に若干の修正加除を施した程度に過ぎなかった、と考えられるのである。この点が本書における〈C〉と、『続日本紀』『日本後紀』『文徳実録』三書における〈C〉との根本的な差異と言えよう。

## 二 位階・官職の記載

薨卒記事における薨卒当事者の位階と官職との記載様態、就中、それら双方を併記する事例のそれについて検討を加えてみよう。

先ず、五国史所見のそうした事例の全てを左記の三形式に分類整理した〈表三〉と、その集計結果たる〈表四〉とを揭示することからはじめよう。

A型……………官位＋官職＋人名

B型……………官職＋官位＋人名

C型……………官職＋官位＋官職＋人名



〈表三〉

〔続日本紀〕

通番号 諸項目															分類形式		収載条				
薨 卒 当 事 者															A	B		C			
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1				大寶 1・1・15			
大納言正広參大伴宿禰御行																					
左大臣正二位多治比真人嶋																					
右大臣從二位阿倍朝臣御主人																					
大納言正三位紀朝臣麻呂																					
左京大夫從四位上大神朝臣高市麻呂																					
彈正尹從四位下衣縫王																					
摂津大夫從三位高向朝臣麻呂																					
式部卿大將軍正四位下下毛野朝臣古麻呂																					
大宰大貳從四位上巨勢朝臣多益須																					
宮内卿從四位下多治比真人水守																					
中納言正四位上兼神祇伯中臣朝臣意美麿																					
尾張国守從四位下勲四等佐伯宿禰大麻呂																					
造宮卿從四位下大伴宿禰手拍																					
右大弁從三位石川朝臣宮麻呂																					
兵部卿從四位上大神朝臣安麻呂																					
																		和銅 1・8・8			
																			慶雲 2・7・19		
																				" 1・7・21	
																					" 2・12・22
																		" 3・2・6			
																			" 4・11・24		
																				" 2・12・20	
																					" 3・6・2
																		" 4・閏6・22			
																			" 4・7・9		
																				" 6・9・17	
																					" 6・12・6
																		" 7・1・27			

35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
宮内卿從四位下高田王	知太政官事一品舍人親王	中納言從三位兼催造宮長官知河内和泉等国事阿倍朝臣広庭	大納言從二位大伴宿祢旅人	彈正尹從四位下酒部王	從二位大納言多治比真人池守	左大弁從三位石川朝臣石足	兵部卿正四位下阿倍朝臣首名	中納言正三位巨勢朝臣邑治	造宮卿從四位下梶犬養宿祢筑紫	民部卿從四位下太朝臣安麻呂	右大臣正二位藤原朝臣不比等	大納言正三位阿倍朝臣宿奈麻呂	大宰大貳正四位下路真人大人	筑後守正五位下道君首名	左大臣正二位石上朝臣麻呂	中納言從三位巨勢朝臣麻呂	知太政官事一品穗積親王	大納言兼大將軍正三位大伴宿祢安麻呂	中納言從三位兼中務卿勳三等小野朝臣毛野
○	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○																	○
7・閏 11・8	7・11 14	4・2 22	3・7 25	2・10 25	2・9 8	天平 1・8 9	4・2 13	1・6 6	神龜 1・4 18	7・7 7	4・8 3	4・1 27	3・7 18	2・4 11	1・3 3	養老 1・1 18	靈龜 1・7 27	7・5 1	7・4 15

[illegible]

74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	小計	60	59	58	57	56
右大臣從一位藤原朝臣豐成	大和守正四位上坂上忌寸犬養	從三位授刀督兼伊賀近江按察使藤原朝臣御楯	武藏守從四位下石川朝臣名人	上總守從四位下阿倍朝臣子嶋	參議礼部卿從三位藤原朝臣弟貞	義部卿從四位下安都王	讚岐守從四位下大伴宿祢犬養	御史大夫正三位兼文部卿神祇伯勲十二等石川朝臣年足	尚藏兼尚侍正三位藤原朝臣宇比良古	參議正四位下安倍朝臣嶋麻呂	武部卿從三位藤原朝臣弟麻呂	大膳大夫從四位下御使王	中宮大夫從四位下佐味朝臣虫麻呂		中務卿正四位下阿倍朝臣佐美麻呂	前左大臣正一位橘朝臣諸兄	中務卿從三位栗栖王	大納言從二位兼神祇伯造宮卿巨勢朝臣奈弓麻呂	中務卿正三位三原王
		○												一					
○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	五四	○	○	○		○
								○						五				○	
神天 護平	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	天 宝 字	〃	〃	〃
1 ・ 11 ・ 27	8 ・ 12 ・ 13	8 ・ 6 ・ 9	8 ・ 3 ・ 9	8 ・ 1 ・ 24	7 ・ 10 ・ 17	7 ・ 5 ・ 27	6 ・ 10 ・ 9	6 ・ 9 ・ 30	6 ・ 6 ・ 23	5 ・ 3 ・ 10	4 ・ 6 ・ 癸卯	4 ・ 閏 4 ・ 7	3 ・ 10 ・ 19		2 ・ 4 ・ 20	1 ・ 1 ・ 6	5 ・ 10 ・ 7	5 ・ 3 ・ 30	4 ・ 7 ・ 10

75	大納言正三位藤原朝臣真楯	○	2 ・ 3 ・ 12
76	刑部卿從三位百濟王敬福	○	2 ・ 6 ・ 28
77	尚膳從三位小長谷女王	○	1 ・ 1 ・ 8
78	備前国々造從四位下上道朝臣正道	○	1 ・ 9 ・ 23
79	參議從三位治部卿兼左兵衛督大和守山村王	○	1 ・ 11 ・ 17
80	內藏頭兼大外記遠江守從四位下高丘宿祢比良麻呂	○	2 ・ 6 ・ 28
81	左京大夫從四位下勳四等小野朝臣竹良	○	3 ・ 5 ・ 8
82	大和国造正四位下大和宿祢長岡	○	3 ・ 10 ・ 29
83	右京大夫從四位下勳四等百濟朝臣足人	○	1 ・ 5 ・ 12
84	左大臣正一位藤原朝臣永手	○	2 ・ 2 ・ 22
85	參議治部卿從四位上多治比真人土作	○	2 ・ 6 ・ 10
86	正三位中納言兼宮內卿右京大夫石川朝臣豐成	○	3 ・ 9 ・ 8
87	參議從四位上阿倍朝臣毛人	○	3 ・ 11 ・ 17
88	造西大寺次官從四位下勳六等津連秋主	○	4 ・ 閏11 ・ 15
89	尚藏從三位吉備朝臣由利	○	5 ・ 1 ・ 2
90	但馬守從四位下安倍朝臣息道	○	5 ・ 3 ・ 4
91	尚膳從三位藤原朝臣家子	○	5 ・ 7 ・ 21
92	上總守從四位下桑原王	○	5 ・ 8 ・ 18
93	從四位上陰陽頭兼安芸守大津連大浦	○	6 ・ 5 ・ 17
94	參議大宰帥從三位勳二等藤原朝臣藏下麻呂	○	6 ・ 7 ・ 1

95	前右大臣正二位勲二等吉備朝臣真備	○	6 ・ 10 ・ 2
96	參議從三位大藏卿兼摂津大夫藤原朝臣楓麻呂	○	7 ・ 6 ・ 13
97	右京大夫從四位下百濟王理伯	○	7 ・ 6 ・ 16
98	參議正四位上陸奥按察使兼鎮守將軍勲三等大伴宿祢駿河麻呂	○	7 ・ 7 ・ 7
99	典侍從三位飯高宿祢諸高	○	8 ・ 5 ・ 28
100	參議從四位下美濃守紀朝臣広庭	○	8 ・ 6 ・ 12
101	大和守從三位大伴宿祢古慈斐	○	8 ・ 8 ・ 19
102	内大臣從二位勲四等藤原朝臣良繼	○	8 ・ 9 ・ 18
103	右大弁正四位下田中朝臣多太麻呂	○	9 ・ 1 ・ 11
104	侍從々四位下奈貴王	○	9 ・ 2 ・ 8
105	參議中衛大將兼式部卿從三位藤原朝臣百川	○	10 ・ 7 ・ 9
106	中納言從三位兼勅旨卿侍從勲三等藤原朝臣繩麻呂	○	10 ・ 12 ・ 13
107	典侍從四位下多可連淨日	○	11 ・ 9 ・ 24
108	前大納言正二位文室真人邑珍	○	11 ・ 11 ・ 28
109	尚侍兼尚藏正三位大野朝臣仲仵	○	天 心 1 ・ 3 ・ 10
110	參議從四位上藤原朝臣乙繩	○	1 ・ 6 ・ 6
111	大納言正三位兼式部卿石上大朝臣宅嗣	○	1 ・ 6 ・ 24
112	典藏從四位下為奈真人玉足	○	1 ・ 7 ・ 27
113	參議從三位中宮大夫兼衛門督大伴宿祢伯麻呂	○	延 曆 1 ・ 2 ・ 3
114	尚侍從二位藤原朝臣百能	○	1 ・ 4 ・ 17

134 133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115

右大臣從二位兼行近衛大將皇太子傳藤原朝臣田麻呂

大宰帥正二位藤原朝臣魚名

參議中宮大夫從四位上紀朝臣家守

左京大夫正四位下藤原朝臣鷹取

散位頭從四位下百濟王利善

中務大輔從四位下豐野真人奄智

尚藏兼尚侍從三位阿倍朝臣古美奈

參議兵部卿從三位兼侍從下總守藤原朝臣家依

刑部卿從四位下兼因幡守淡海真人三船

中納言從三位大伴宿祢家持

中納言正三位兼式部卿藤原朝臣種繼

左京大夫從三位兼右衛士督下總守坂上大宿祢苅田麻呂

宮内卿正四位上石川朝臣垣守

尚縫從三位藤原朝臣諸姉

武藏国足立郡采女掌侍兼典掃從四位下武藏宿祢家刀自

左中弁兼河内守從四位下巨勢朝臣苗麻呂

右衛士督從四位下兼皇后宮亮丹波守勲十一等笠朝臣名末呂

中納言從三位兼兵部卿皇后宮左京大夫和守石川朝臣名足

前右大臣正二位大中臣朝臣清麻呂

參議宮内卿正四位下兼神祇伯大中臣朝臣子老

○				○	○	○	○	○		○			○	○	○	○	○	○	○
○		○	○					○	○		○	○							○
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
8	7	7	6	6・閏	6	5	5	5	4	4	4	4	3	3	3	3	3	2	2
・1	・7	・6	・10	・5	・4	・6	・5	・1	・9	・8	・7	・6	・10	・6	・5	・5	・4	・7	・3
25	28	10	25	27	11	29	5	7	23	28	17	20	28	5	24	10	19	25	19

〔日本後紀〕

(備考) 140と141は同事重出。記載形式を問題としているので、これら両者を採り上げた。

通番号 諸項目		1	2	3
薨 卒 当 事 者		右大臣正二位兼行皇太子傳中衛大將藤原朝臣繼繩 正四位上因幡国造浄成女 參議左大弁近衛大將兼神祇伯正四位上大中臣朝臣諸魚		
分類形式	A	○		
	B	○		
	C	○		
収 載 条		延曆 15・7・16	15・10・15	16・1・7

合計	小計	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135
		木工頭正四位下伊勢朝臣老人 尚掃從四位上美作女王 右大臣從二位兼中衛大將藤原朝臣是公 參議兵部卿從三位多治比真人長野 大宰員外帥從三位藤原朝臣浜成 大藏卿從四位上石川朝臣豊人 大藏卿從四位上石川朝臣豊人 右京大夫從四位下藤原朝臣菅繼 左中弁從四位下百濟王仁貞 大藏卿從四位上佐伯宿祢真守									
四	三										
一一九	六五	○	○	○	○	○	○	○		○	○
二一	一六										○
		10・11・3	10・7・29	10・5・20	10・5・4	9・5・3	9・2・18	8・12・22	8・9・19	8・7・7	8・4・8



△ 23	22	△ 21	△ 20	19	△ 18	17	16	15	14	△ 13	△ 12	11	10	9	8	7	6	5	4
典侍正三位小野朝臣石子	播磨守贈正四位下賀陽朝臣豐年	渤海大使從三位王孝廉	尚膳從三位永原朝臣惠子	左京大夫從四位上藤原朝臣今川	常陸守從三位菅野朝臣真道	右大臣從二位藤原朝臣内麻呂	備前守正四位下藤原朝臣真雄	大納言正三位兼右近衛大將兵部卿坂上大宿祢田村麻呂	宮内卿正三位藤原朝臣雄友	左京大夫兼摂津守正四位下三嶋真人名繼	尚膳從三位藤原朝臣勤子	東山道觀察使左近衛中將正四位下行春宮大夫安倍朝臣兄雄	右大臣從二位神王	大納言正三位兼彈正尹弼志濃王	常陸守從四位下紀朝臣直人	中納言從三位和朝臣家麻呂	贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前国造和氣朝臣清麻呂	典侍正四位上和氣朝臣広虫	大學頭從四位下紀朝臣作良
																	○		
○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○		○	○		○	○
								○				○		○					
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	弘仁	〃	〃	大同	〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	6	6	6	5	5	3	2	2	2	1	4	3	1	24	24	23	18	18	18
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
3	6	6	5	7	6	10	7	5	4	4	6	10	4	11	8	4	2	1	1
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
22	27	14	14	24	29	6	8	23	23	11	12	19	24	12	27	27	21	20	16

○ 43	○ 42	○ 41	○ 40	△ 39	△ 38	△ 37	△ 36	△ 35	△ 34	△ 33	△ 32	△ 31	△ 30	△ 29	△ 28	△ 27	△ 26	△ 25	△ 24
相摸守從四位下藤原朝臣友人	伊勢守從四位下藤原朝臣藤成	東宮學士從四位下上毛野朝臣穎人	修理大夫從四位下橘朝臣永繼	參議從三位行近江守秋篠朝臣安人	參議從四位下大宰大貳安倍朝臣寬麿	參議正四位下行大宰大貳紀朝臣広浜	圖書頭從四位下御室朝臣今嗣	右大臣從二位兼行皇太弟傳藤原朝臣園人	越前權守從四位上大野朝臣直雄	東宮學士從四位下高村宿祢田使	正三位中納言藤原朝臣葛野麿	治部卿四品坂本親王	刑部卿從四位上大庭王	尚侍從二位五百井女王	中納言從三位兼兵部卿藤原朝臣繩主	典侍從四位下橘朝臣安万子	參議從四位上藤原朝臣藤繼	中納言正三位巨勢朝臣野足	尚水從四位下川原女王
											○								
○	○	○	○				○		○	○		○	○	○		○	○	○	○
					○	○		○							○				
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
13 ・ 8 ・ 16	13 ・ 5 ・ 4	12 ・ 8 ・ 18	12 ・ 3 ・ 24	12 ・ 1 ・ 10	11 ・ 11 ・ 11	10 ・ 7 ・ 2	10 ・ 6 ・ 21	9 ・ 12 ・ 19	9 ・ 12 ・ 2	9 ・ 11 ・ 17	9 ・ 11 ・ 10	9 ・ 11 ・ 5	9 ・ 9 ・ 26	8 ・ 10 ・ 10	8 ・ 9 ・ 16	8 ・ 7 ・ 16	8 ・ 3 ・ 25	7 ・ 12 ・ 14	7 ・ 4 ・ 14

△63	△62	△61	△60	○59	○58	○57	△56	△55	○54	△53	△52	△51	○50	△49	△48	○47	△46	○45	△44
参議從四位下伴宿祢国道	東宮學士從四位下安野宿祢文繼	尚侍從三位藤原朝臣美都子	讚岐權守從四位下高瀬王	右兵衛督從四位下勲七等坂上大宿祢広野	尾張守從四位下路真人年繼	伊与守從四位上安倍朝臣真勝	左大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣冬嗣	参議從四位下橘朝臣常主	越前守從四位上紀朝臣末成	参議從三位多治比真人今麿	彈正尹四品佐味親王	尚闌從三位笠朝臣道成	彈正大弼從四位下橘朝臣長谷麻呂	中納言從三位藤原朝臣貞嗣	参議從四位上宮内卿藤原朝臣道雄	越後守從四位下伴宿祢弥嗣	中納言兼右近衛大將從三位勲四等文室朝臣綿麿	刑部卿從四位上百濟王教徳	典侍從四位下清原朝臣吉子
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
							○								○				
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	天長	〃	〃	〃	〃	〃
5・11・12	5・10・26	5・9・4	5・6・11	5・閏3・9	4・6・24	3・9・6	3・7・24	3・6・2	2・12・4	2・8・29	2・7・16	2・1・12	1・2・9	1・1・4	14・9・22	14・7・22	14・4・26	13・10・17	13・9・20

〔続日本後紀〕

(備考) 通番号欄の○印は類聚国史、△印は日本紀略に拠り各々補った。

合計	△75	○74	○73	○72	○71	△70	△69	○68	△67	△66	△65	△64
	散位頭從四位下茅野王	出雲守正四位下紀朝臣咋麻呂	右兵衛督從四位下伴宿祢真臣	左兵衛督從四位上藤原朝臣家雄	正四位上武藏守石川朝臣河主	大藏卿從三位藤原朝臣淨本	大納言正三位良岑朝臣安世	春宮亮從四位下藤原朝臣三成	參議從四位上小野朝臣岑守	參議正三位春原朝臣五百枝	出雲守正四位上平野王	尚闌從四位下秋篠朝臣室子
四					○							
六〇	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
一一												
	〃 10・2・18	〃 10・1・19	〃 9・5・24	〃 9・3・20	〃 7・12・27	〃 7・7・21	〃 7・7・6	〃 7・4・30	〃 7・4・19	〃 6・12・19	〃 6・6・19	〃 6・5・8

通番号 諸項目	1	2
蒐 卒 当 事 者	參議刑部卿從三位南淵朝臣弘貞 中納言從三位直世王	
A		
B	○	○
C		
分 類 形 式		
収 載 条	天長 10・9・19 承和 1・1・4	

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
致仕左大臣正二位藤原朝臣緒嗣	参議從三位勲六等兼越中守朝野朝臣鹿取	出雲權守正四位下文室朝臣秋津	伯耆守從四位上笠朝臣梁麿	彈正尹三品阿保親王	文章博士從三位菅原朝臣清公	中務大輔從四位下高階真人石河	武藏守從四位下正道王	伊予国守從四位上紀朝臣深江	右大臣從二位皇太子傳藤原朝臣三守	参議左大弁從三位藤原朝臣常嗣	右京大夫從四位上橘朝臣弟氏	伊勢守從四位下丹墀真人清貞	治部卿正四位下安倍朝臣吉人	右兵衛督從四位下百濟王安義	右大臣從二位清原真人夏野	大宰大貳從四位上藤原朝臣広敏	参議從二位紀朝臣百繼	尚縫從四位下和氣朝臣緒繼	左中弁從四位下笠朝臣仲守
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○								○										
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
10 ・ 7 ・ 24	10 ・ 6 ・ 11	10 ・ 3 ・ 2	9 ・ 12 ・ 8	9 ・ 10 ・ 22	9 ・ 10 ・ 17	9 ・ 5 ・ 29	8 ・ 6 ・ 11	7 ・ 10 ・ 5	7 ・ 7 ・ 7	7 ・ 4 ・ 23	7 ・ 4 ・ 5	6 ・ 1 ・ 23	5 ・ 6 ・ 10	4 ・ 12 ・ 2	4 ・ 10 ・ 7	4 ・ 5 ・ 28	3 ・ 9 ・ 19	3 ・ 9 ・ 6	2 ・ 12 ・ 4

〔文德実録〕

1	通番号 諸項目	
大宰帥三品葛井親王	薨	
	卒	
	当	
	事者	
	A	分類形式
○	B	
	C	
嘉祥 3・4・2	収載条	

合計	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
	近江權守從四位下藤原朝臣貞主 神祇伯正四位下橘朝臣氏人 參議正四位下三原朝臣春上 典侍從四位上大和朝臣館子 參議從四位上和氣朝臣真綱 神祇伯正四位下田口朝臣佐波主 致仕參議正三位藤原朝臣綱繼 尚藏從二位緒繼女王 右大臣從二位橘朝臣氏公 尚侍從二位百濟王慶命 越前守從四位下良岑朝臣木連 左中弁從四位上藤原朝臣嗣宗 陸奥出羽按察使從四位下藤原朝臣富士麻呂												
○													
三三	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二													
	〃	〃	〃	嘉祥 2・1・22	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	3・2・16	2・11・29	2・6・28	2・1・22	14・12・19	14・11・7	14・7・26	14・閏3・23	13・9・27	13・4・13	12・11・18	12・7・4	11・9・16

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
前豐後權守從五位下登美真人直名	一品大宰帥葛原親王	侍医外從五位下菅原朝臣梶成	參議正四位下左兵衛督兼近江守藤原朝臣助	備中守從四位上源朝臣安	大内記從五位下和氣朝臣貞臣	越中權守從五位上紀朝臣椿守	大和守正五位下丹墀真人門成	治部少輔兼齋院長官從五位下藤原朝臣関雄	參議左大弁從三位小野朝臣篁	勘解由次官從五位下菅原朝臣善主	相摸權守從四位下橘朝臣真直	主計頭從五位下都宿祢貞繼	右兵衛佐兼信濃介從五位下紀朝臣最弟	越前守正五位下藤原朝臣高房	從四位下丹波權守伴宿祢成益	參議正四位下行宮内卿兼相摸守滋野朝臣貞主	摂津權介從五位下善友朝臣額主	從四位下治部大輔興世朝臣書主	右兵衛督正四位下坂上大宿祢清野
	○														○			○	
○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○		○
			○													○			
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	仁寿	〃	〃
3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	1	3	3
6	6	6	5	4	4	3	3	2	12	11	6	5	2	2	2	2	6	11	8
10	4	2	29	28	14	28	22	14	22	7	20	22	27	25	10	8	29	6	4

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22
大學助從五位下山田連春城	參河國守從五位下安倍朝臣氏主	陸奥權介從五位下藤原朝臣大滝	宮内卿從三位高枝王	尾張國守從五位上藤原朝臣宗善	宮主外從五位下占部宿祢雄貞	丹波守從五位上文室朝臣助雄	右京大夫兼加賀守正四位下藤原朝臣衛	正四位下因幡權守南淵朝臣永河	正四位下右京權大夫兼山城守長岑宿祢高名	權中納言兼左衛門督從二位藤原朝臣長良	右京大夫從四位下藤原朝臣諸成	大判事兼明法博士備後介從五位下伴宿祢宗	前山城守從五位下藤原朝臣松影	美作守正五位下藤原朝臣行道	木工頭正五位下石川朝臣長津	正五位下備前守藤原朝臣大津	鎮守將軍從五位下伴宿祢三宗	左大臣正二位源朝臣常	相摸權介從五位上山田宿祢古嗣
								○	○							○			
○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○		○	○	○
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	天安	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	齊衡	〃
2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	3	3	2	2	1	1	1	1	1	3
6	6	6	5	4	4	3	11	10	9	7	4	1	1	12	12	10	8	6	12
20	15	2	15	16	10	14	5	12	3	3	18	28	22	19	3	9	16	13	21



## 〔三代実録〕

合計	42
	正四位下彈正大弼兼美作權守正行王
	〇
七	
三三	
二	
	2・7・10

通番号 諸項目													分類形式		収載条	
葬 卒 当 事 者													A	B		C
13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	大納言正三位兼行民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁			
													参議從四位上行式部大輔藤原朝臣貞守			
													從四位上行備前守藤原朝臣春津			
													尚侍從三位当麻真人浦虫			
													尚侍從三位広井女王			
													從四位上行摂津守滋野朝臣貞雄			
													中宮大夫從四位下藤原朝臣良仁			
													勘解由次官從五位下兼行明法博士御輔朝臣長道			
													正五位下行内藥正兼侍医参河權守物部朝臣広泉			
													正三位行中納言橘朝臣岑繼			
													從五位下行内藥正大神朝臣虎主			
													参議從四位上行大宰大貳清原真人岑成			
													正五位上行刑部大輔豐階真人安人			
													貞観			
													1・4・23			
													3・9・24			
													2・12・29			
													2・10・29			
													2・10・3			
													2・9・26			
													2・8・5			
													1・12・22			
													1・10・23			
													1・8・10			
													1・7・13			
													1・5・1			
													1・4・23			

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
右大臣正二位藤原朝臣良相	從五位上行掃部頭藤原朝臣貞敏	大納言正三位平朝臣高棟	前陸奥守從五位上坂上大宿祢当道	從四位上行神祇伯中臣朝臣逸志	典侍從四位上藤原朝臣有子	從四位上行下野權守利基王	雅樂權大允外從五位下和邇部宿祢大田麿	從四位上行伊与守豐前王	從五位下行越後介高橋朝臣文室麻呂	前宮内卿正四位下豐江王	尚藏從三位菅野朝臣人数	參議刑部卿正四位下兼行越前權守正躬王	從四位下行近江權守良岑朝臣清風	大納言正三位源朝臣弘	從五位上行助教滋善宿祢宗人	從四位上行中務大輔清原真人淹雄	從四位下行内藏權頭藤原朝臣興邦	大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定	從五位下守大判事兼行明法博士讚岐朝臣永直
	○			○		○		○	○				○		○	○	○		○
○		○	○		○		○			○	○			○					
												○						○	
9・10・10	9・10・4	9・5・19	9・3・9	9・1・24	8・5・28	8・1・24	7・10・26	7・2・2	6・2・2	5・7・16	5・5・19	5・5・1	5・4・15	5・1・25	5・1・20	5・1・11	5・1・5	5・1・3	4・8・是月

34	參議正四位下行右衛門督兼太皇太后宮大夫藤原朝臣良繩
35	從四位下行大學博士大春日朝臣雄繼
36	從五位下守大判事兼行明法博士完令永繼
37	美濃權守從五位上滋野朝臣安城
38	左大臣正二位源朝臣信
39	從四位上行越前守源朝臣啓
40	從四位下行伊予權守当麻真人清雄
41	參議從三位春澄朝臣善繩
42	從五位上行天文博士中臣志斐連春繼
43	從五位下行陰陽助兼陰陽博士笠朝臣名高
44	二品行大宰帥賀陽親王
45	正三位守右大臣藤原朝臣氏宗
46	正四位下行播磨權守紀朝臣今守
47	宮主從五位下兼行丹波權掾伊伎宿禰是雄
48	外從五位下行侍医兼美作權介坂上宿禰貞野
49	參議正四位下源朝臣生
50	太政大臣從一位藤原朝臣良房
51	從四位上行右近衛中将兼阿波守源朝臣興
52	從四位下行主殿頭兼伊予權守当麻真人鴨繼
53	前近江權守從四位下藤原朝臣有貞

73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54
從四位上行 中宮大夫藤原朝臣秀道	從四位上行 左衛門督大江朝臣音人 權掌侍從四位下藤原朝臣宜子	參議從三位 左衛門督大江朝臣音人	從四位上行 右兵衛督兼相摸守藤原朝臣良尚	參議從三位 左大弁藤原朝臣家宗	從四位下行 周防權守紀朝臣有常	從五位上行 典藥頭兼侍医興道宿祢名繼	前丹波守從五位上坂上大宿祢貞守	二品行式部卿兼大宰帥忠良親王	神祇伯從四位下兼行美濃權守藤原朝臣良近	從四位上行 神祇伯兼伊与權守藤原朝臣広基	參議正四位下行 右兵衛督藤原朝臣仲統	從四位下行 丹波守良岑朝臣經世	大納言正三位兼行 右近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣常行	從四位上行 大和守在原朝臣善淵	外從五位下行 權針博士下道朝臣門繼	從五位上行 筭博士兼但馬守家原朝臣氏主	從五位上行 陰陽頭兼陰陽博士安芸權介滋岳朝臣川人	從四位上行 右兵衛督兼越前權守清原真人秋雄	從四位上行 彈正大弼橘朝臣貞根
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○						○												
		○		○					○	○	○		○						
〃	〃	〃	〃	〃	元慶	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
3	2	1	1	1	1	18	18	18	17	17	17	17	17	17	16	16	16	16	15
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
2	6	11	3	2	1	11	9	2	9	6	6	5	2	2	8	7	5	4	8
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
10	20	3	10	10	23	19	9	20	9	29	6	19	17	2	9	30	27	24	28

93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74
從四位下行 越前權守藤原朝臣弘經	從四位上行 彈正大弼兼越前權守兼行王	尚侍正二位源朝臣全姫	從五位下行 丹波介卜部宿祢平麿	參議正四位下行 右衛門督兼讚岐守源朝臣舒	大藏卿正四位下基兄王	從四位下行 大和守坂上大宿祢滝守	參議從三位行 右衛門督兼播磨權守源朝臣勤	外從五位下行 天文博士中臣志斐連安善	參議從三位行 刑部卿菅原朝臣是善	從五位上行 摂津權守菅野朝臣佐世	從四位上行 右近衛權中將兼美濃權守在原朝臣業平	從四位上行 左京大夫忠範王	從四位上行 大宰大貳橘朝臣三夏	從四位下行 播磨守橘朝臣信陰	從四位下行 但馬權守源朝臣顯	宮内卿正四位下源朝臣覺	從四位上行 伊与守輔世王	從四位上行 侍從源朝臣兼善	文章博士從五位下兼行 大内記越前權介都朝臣良香
○	○		○			○		○		○	○	○	○	○	○		○	○	
		○			○											○			
				○			○		○										○
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	6	6	5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
1	9	1	12	11	11	11	5	2	8	5	5	2	1	1	10	10	6	4	2
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
15	21	25	5	29	22	9	16	4	30	28	28	6	13	6	29	20	24	25	25

〈表四〉

A	分類形式	五国史
	続日本紀	日本後紀
前半一 (約〇・七%)	四 (約二・八%)	三 (約九・一%)
後半三 (約二・一%)		
	続日本後紀	文徳実録
	七 (約一六・七%)	三代実録
	六二 (約五九・六%)	

合計	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94
	四品守中務卿兼大宰帥惟彦親王 從五位下行丹波介清内宿祢雄行 典侍正四位下甘南備真人伊勢子 正四位下行因幡守平朝臣房世 從四位上行山城權守恒基王 從四位下行侍從源朝臣興扶 參議刑部卿正四位下兼行近江守忠貞王 正五位下行大学博士善淵朝臣永貞 前周防守從五位上紀朝臣安雄 從四位下行信濃守橘朝臣良基 從四位上行大宰大貳源朝臣行有										
六二	○	○		○		○	○	○		○	○
二四			○						○		
一八					○						
	〃	〃	〃	仁和	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	3	3	2	1	8	8	7	7	7	7	7
	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	6	6	5	12	8	1	12	8	6	6	1
	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	20	8	28	11	27	19	11	21	14	10	29

守	行	合 計	C		B	
			前半五 (約三・五%) 後半一六 (約一一・一%)	二二 (約一四・六%)	前半五四 (三七・五%) 後半六五 (約四五・一%)	一一九 (約八二・六%)
前半 ○ 後半 ○	前半 ○ 後半 一	前半六〇 (約四一・七%) 後半八四 (約五八・三%)	三三三 (一〇〇%)	二 (約五・七%)	二六 (約七八・八%)	三三 (約九四・三%)
○	三 (約四二・九%)	三五 (一〇〇%)	二 (約五・七%)	二 (約五・七%)	三三 (約七八・六%)	二四 (約二三・一%)
○	○ (〇%)	四二 (一〇〇%)	一八 (約一七・三%)	四 (約一二・一%)	○ (〇%)	○ (〇%)
○	一 (約一一・一%)	一〇四 (一〇〇%)	○ (〇%)	○ (〇%)	○ (〇%)	○ (〇%)
四 (五%)	七八 (九七・五%)					

(備考) A・B・C各欄における%は、各五国史毎のそれら三形式事例合計数に占める百分比であり、行・守各欄における%は、該字の使用さるべき各五国史毎のA・C両形式事例合計数に占める百分比である。

これにより、諸種の事柄を指摘しうるが、差し当たり、ここで必要と考える点のみを挙げることにする。

各五国史におけるABC各型式の比率の高低に関しては、

①、『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』の三書においては、B型→C型→A型の順に低くなっていること。  
 ②、『文徳実録』においては、B型→A型→C型の順に低くなっていること。  
 ③、『三代実録』においては、A型→B型→C型の順に低くなっていること。  
 ABC各型式の各五国史における比率の高低に関しては、

③、A型式は『三代実録』、B型式は『続日本後紀』、C型式は『三代実録』において各々最高をマークしていること。  
 ④、A型式は『続日本後紀』、B型式は『三代実録』、C型式は『続日本後紀』『文徳実録』両書（これら両書は同率）において各々最低をマークしていること（但し、『続日本紀』を前半、後半に分けて考えてみた場合、その前半の方が、それら両書へ『続日本後紀』と『文徳実録』よりも、さらに一層低率である。）。

等々の事柄が知られる。このうち①、②、③により、『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『文徳実録』の四書ではB型式が、『三代実録』ではA型式が、各々最も卓越していること、④、③により、『三代実録』ではC型式が最も低率であるとはいへ、それでもその比率は、他余の四国史におけるそれよりも高いこと、さらに、このことと、④の「B型式は『三代実録』において最低をマークしていること」（摘意）とから、『三代実録』の薨卒記事における薨卒当事者の官位・官職の記載は、五国史の当該記事記載中、A・C両型式を採るに最も徹底していると言えるのである。而して、これを端的に明示するのが、既掲〈表四〉中の「行」「守」両文字の表記である。同表をみるに、『三代実録』には「行」が七八例、「守」が四例もあり、同書におけるそれら両字の用例数は、無論、他余の四国史におけるその比でないことを理會しうる。しかも、その「行」「守」両字のうち、殊に「行」は、同書において該字の使用さるべきA・C両型式事例のすべて（但し、A型式八六二例、C型式八一八例の合計八〇〇例）にみられるという程の徹底さである。  
 （中の「守」字使用の45、94の二事例を除く七八事例。）

尚、斯かる事柄は〈表五〉に示す如く、『三代実録』の薨卒記事において薨卒当事者を記載するに、官位＋人名なる形式を採る事例中、男性官人の占める百分比（約一三・三%）が、他余の四国史におけるそれ（『続日本紀』八四五・七%）



〈表五〉

諸項目	五国史	続日本紀	日本後紀	続日本後紀	文徳実録	三代実録
A、官位+人名の記載形式を採る事例数	前半五五 後半二六	八一	一〇	二〇	五	一五
B、官位+人名の記載形式を採る男性官人数	前半三三 後半四	三七	一〇	二二	三	二
C、 $\frac{B}{A} \times 100$	前半六〇 後半一五・四	約四五・七	一〇〇	六〇	六〇	約一三・三

『日本後紀』△一〇〇%▽『続日本後紀』△六〇%▽『文徳実録』△六〇%▽に較べて最も低率を示していること（『続日本紀』の後半部分における件の比率△一五・四%▽よりも低率）換言すれば、同書がその薨卒記事において、薨卒当事者について記載するに際し、件の記載すべき某男性官人が散位者でない限り、その所帯官職を努めて登載せんとし、且つそれを履行しているとみられることから、はつきりと言い得られるのである。

斯くして、茲に『三代実録』の薨卒記事における薨卒当事者の記載様態に関する性格ないし特色の一斑を明らかにしうるのである。

### 三 服解関係の記載

五国史の薨卒記事における薨卒当事者の服解と、それに係わる事柄の記述について検討を加えてみよう。

さて、斯うした記述は『続日本紀』に全く見られず、『日本後紀』に、

①、弘仁初叙<sub>二</sub>從五位下<sub>一</sub>。任<sub>二</sub>右兵衛佐<sub>一</sub>。遭<sub>二</sub>父喪<sub>一</sub>罷<sub>レ</sub>職。更任<sub>二</sub>右衛門佐<sub>一</sub>。(從四位下坂上大宿禰広野卒伝天長5・関3・9条(類聚国史))

の一例、『続日本後紀』に、

②、仁明天皇踐祚之初。叙<sub>二</sub>正五位上<sub>一</sub>。尋授<sub>二</sub>從四位下<sub>一</sub>。明年居<sub>二</sub>親母喪<sub>一</sub>。殆至<sub>レ</sub>滅<sub>レ</sub>性。不<sub>レ</sub>幾而卒。(從四位下甘南備真人高直卒伝承和3・4・18条)

③、弘仁二年恩勅。叙<sub>二</sub>從五位下<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>帝昔在藩之日侍講<sub>一</sub>也。二月補<sub>二</sub>左衛門佐<sub>一</sub>。十二月服解。三年奪<sub>レ</sub>情除<sub>二</sub>近江介<sub>一</sub>。

(從三位朝野朝臣鹿取寛伝承和10・6・11条) (二年)

④、初除<sub>二</sub>大学助<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>父憂<sub>一</sub>去<sub>レ</sub>職。天長八年正月除<sub>二</sub>從五位下<sub>一</sub>。(從四位下良岑朝臣木連卒伝嘉祥2・6・28条)

の三例、『文德実録』に、

⑤、三年<sup>(天長)</sup>拜<sub>二</sub>内舍人<sub>一</sub>。七年喪<sub>レ</sub>父。孝恩過<sub>レ</sub>礼。幾<sub>二</sub>於毀滅<sub>一</sub>。太子踐祚。拜<sub>二</sub>右近衛将監<sub>一</sub>。(從四位下藤原朝臣岳守卒伝仁寿1・9・26条) (四年)

⑥、九年授<sub>二</sub>從五位下<sub>一</sub>。拜<sub>二</sub>大宰少貳<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>詔不<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>之官。其夏喪<sub>レ</sub>父。哀毀過<sub>レ</sub>礼。十年為<sub>二</sub>東宮学士<sub>一</sub>。(從三位小野朝臣篁筠伝仁寿2・12・22条)

(二年)

⑦、数歳喪<sub>レ</sub>母。哀戚過<sub>レ</sub>礼。叔父参議真綱深相矜愛。弱冠從<sub>二</sub>治部卿安倍朝臣吉人<sub>一</sub>受<sub>二</sub>老莊<sub>一</sub>。(從五位下和氣朝臣貞臣卒伝仁寿3・4・14条)

⑧、九年正月転為<sub>二</sub>播磨守<sub>一</sub>。大学頭如<sub>レ</sub>故。七月遭<sub>二</sub>太上天皇崩<sub>一</sub>服解。八月復<sub>レ</sub>任。(天台沙門素然卒伝仁寿2・12・20条) (二ヶ月)

⑨、弘仁十二年丁<sub>二</sub>父憂<sub>一</sub>。哀毀過<sub>レ</sub>礼。天長三年為<sub>二</sub>陸奥按察使記事<sub>一</sub>。(從五位上山田宿禰古嗣卒伝仁寿3・12・21条) (六年)

の五例みられる。これら各四国史所見事例数の、それら各四国史載録の薨卒記事合計数に占める百分比は、『続日本紀』が〇%、『日本後紀』が約〇・六%、『続日本後紀』が約三・二%、『文德実録』が約六・三%となつて、斯うした数値の面からも、当該記述に関して、四国史中、『文德実録』が最も卓越していると言える。また、服解から服闋後の官職への復帰迄の期間(以下、これを「復職期間」と仮称する。)について、足掛け年数単位で知りうるのは、『続日本後紀』に一例(③(二年))、『文

徳実録』に三例(⑤〔四年〕、⑥〔二年〕、⑨〔六年〕)、しかも、それを月数単位まで知りうるのは、『文徳実録』にのみ一例(⑧〔一ヶ月〕)存することを以てしても、薨卒記事における薨卒当事者の官歴次第を詳細に記載するという点で、『文徳実録』がそれに先行する他余の三国史に比較して一段と勝っていると看做しうるのである。

ところで、この『文徳実録』所見の事例をみるに、「喪父。孝恩過礼」(⑤)、「喪父。哀毀過礼」(⑥)、「喪母。哀戚過礼」(⑦)、「丁父憂。哀毀過礼」(⑨)とあって、そこに「過礼」「哀毀」「哀」などという共通表現をみることも、旁注意しておきたい。

それでは『三代実録』の場合は如何であろうか。次下に同書の当該関係部分を抜粋して検討を加えてみよう

(事例②は、飯田瑞穂氏「尊経閣文庫蔵『類聚国史』抄出紙背に。高橋隆三先生古記録の研究」に拠った。『喜寿記念論集』)

①、九年進正五位下。俄而拜右馬頭。(中略)嘉祥三年丁母憂解職。未幾奪情起之。拜右兵衛督。(從四位上藤原朝臣春津卒伝)

・ 13条 (不明)

②、奄丁母憂。哀啼哭泣。欧血絶氣。經時乃蘇。不勝悲慟。服中病卒。(從四位下藤原朝臣良仁卒伝 貞観2・8・5条)

③、承和七年為明法博士。仁寿三年叙外從五位下。母喪去職。後復本官。(從五位下御輔朝臣長道卒伝 貞観2・9・26条) (不明)

④、十三年為右衛門督。兼相摸守。十四年進從四位上。其年冬十二月母憂解職。十五年二月詔奪情以本官起

之。(正三位橘朝臣岑繼體 貞観2・10・29条) (一ヶ月)

⑤、六年授從五位下。為筑後守。七年二月母憂去職。其年十月拜近江介。(從四位上清原真人岑成卒伝 貞観3・2・29条) (八ヶ月)

⑥、⑦、五年為播磨守。中務卿如故(中略)九年七月。嵯峨太上天皇崩。定丁憂解職。九月詔起之以本官(中

略)十五年春為尾張守。中務卿如故。嘉祥二年正月拜中納言。是月母尚侍百濟王氏薨。定遭喪去職。三月詔

奪情起之。(正三位源朝臣定範 貞観5・1・3条) (一ヶ月) (一ヶ月)

⑧、二年正月兼筑前守。閏二月為春宮大進。本官如故。三月轉亮。八月母喪解官。九月拜內藏權頭。(從四位下藤原朝臣興邦卒伝貞觀5・11条)〔一ヶ月〕

(天長) 貞觀5・11条

⑨、八年八月除侍從。數月遷雅樂頭。(中略)四年冬十月父大臣薨。淹雄居喪。哀毀過禮。十二月詔奪情。(承和)

以本官起之。(中略)天安二年五月拜中務大輔。貞觀二年八月丁母憂解職。十月詔起之。(從四位上清原真人淹雄卒伝貞觀5・11条)

〔二ヶ月〕 〔二ヶ月〕

⑪、二年遷刑部卿。未幾遷治部卿。信濃守如故。九年七月遭太上天皇崩解職。同月拜參議。九月復本官治部卿。(承和)

卿。(正三位源朝臣弘範伝貞觀5・1・25条)〔同月〕

⑫、二年遷美濃介。同年遷播磨權介。並左近衛少將如故。是年母喪解職。數月之後。詔以本官起之。(從四位下良岑朝臣清風卒伝貞觀5・4・15条)〔數月〕

(天安) 卒伝貞觀5・4・15条

⑬、天長三年為大學助。俄而遷式部大丞。五年父憂去職。服中詔以本官起之。(中略)仁壽三年春加正五位下。為大和守。齊衡二年為左京權大夫。大和守如故。天安元年九月丁母憂解職。服闋之後。二年十一月拜

民部大輔。(從四位上豐前王卒伝貞觀7・2・1条)〔不明〕 〔十五ヶ月〕

⑭、承和三年為內藏少允。轉大允。助。十一年授從五位下。十二年母喪解官。詔以本官起之。(從四位上中臣朝臣逸志卒伝貞觀9・11条)

⑮、承和九年進正四位下。更拜大藏卿。十年授從三位。仁壽元年拜參議。三年六月親喪解職。哀毀過禮。七月

詔奪情。以本官起之。(正三位平朝臣高棟薨貞觀9・5・19条)〔一ヶ月〕

⑯、九年春授從五位下。數歲轉頭。齊衡三年兼備前介。明春加從五位上。天安二年丁母憂解官。服闋拜掃部

頭。(從五位上藤原朝臣貞敏卒伝貞觀9・10・4条)〔不明〕

⑰、九年春授從五位下。數歲轉頭。齊衡三年兼備前介。明春加從五位上。天安二年丁母憂解官。服闋拜掃部

頭。(從五位上藤原朝臣貞敏卒伝貞觀9・10・4条)〔不明〕

⑮、齊衡元年兼播磨介。俄而拜春宮亮。侍從。內藏助。播磨介並如故。是年冬。父大津卒於任國。始聞父疾。

即欲奔赴。天皇不聽。及得審問。嘔血氣絕。數尅乃蘇。去職不仕。詔奪情以本官起之。俄而兼左

兵衛權佐。二年授從五位上。(中略)三年春遷左大弁。左近衛中將備前守並如故。母紀氏寢疾疲憊。良繩晝夜扶持。

不捨左右。衣不解帶。目不接睫。終然丁憂。解去官職。哀号過禮。殆於毀滅。數月之後。以本官起之

(正四位下藤原朝臣良繩 卒伝 貞觀10・2・18条) (一年以内) (數月)

⑯、四年遷為左衛門督。八年兼武藏守。九年七月太上天皇崩。丁憂去職。同月拜中納言。(正二位源朝臣信實傳 貞觀10・閏12・28条)

[同月]

⑰、三年遷右兵衛權佐。齊衡元年六月丁父大臣憂解職。七月詔以本官起之(中略)三年為筑前守。中將

如故。貞觀元年六月。母喪去職。二年正月詔奪情起之(從四位上源朝臣興卒 伝 貞觀14・11・19条) (一ヶ月) (七ヶ月)

⑱、為侍從。四年十月父大臣薨。因而解官。明年正月詔以本官起之(中略)其間兼信濃守備中權介。轉

權守豐前守。天安元年冬母喪去職。服紀未終。詔起之(從四位上清原真人秋雄 卒伝 貞觀16・4・24条) (三ヶ月) (不明)

⑲、九年三月授從三位。十月父大臣薨。居喪去職。紫毀過禮。十一月詔以本官起之(正三位藤原朝臣常行薨 伝 貞觀17・2・17条) (二ヶ月)

⑳、七年遷右兵衛佐。是年七月遭父大臣喪解職。九月詔以本官起之(中略)十二年春兼備前守。夏丁母

憂去職。未幾詔奪情起之(正四位下藤原朝臣仲統 卒伝 貞觀17・6・6条) (二ヶ月) (不明)

㉑、三年正月為伊勢權介。倣裝就路。有詔召還。拜右少弁。四年遭母喪解職。服紀未終。詔以本官起之

(從四位下藤原朝臣良近 卒伝 貞觀17・9・9条) (不明)

㉒、五年為左馬助。十一年十二月遭父喪去職。十二年三月詔以本官起之(從五位上坂上大宿禰貞守 卒伝 貞觀18・9・9条) (三ヶ月)

㉓、貞觀元年春徵為左近衛少將。兼上總權介。二年春停上總權介。兼近江權介。丁母憂解職。服紀之中。詔

以本官一起之（從四位上藤原朝臣良尚卒伝元慶1・3・10条）〔不明〕

③、仁和元年正月出為大宰大貳。丁母憂去職。数月 詔以本官一起之（從四位上源朝臣行有卒伝仁和3・6・20条）〔数月〕

『三代実録』には、以上の三一例を検出する。この事例数は、一つの薨卒記事中に薨卒当事者の服喪が父母両親に関わり、二度行なわれているものを、各々一例づつの二例と看做して計算したものである（斯かる父母に関わる事例は、上述の『文徳実録』及び、それに先行する三国史には全くみられない。）。この三一例という事例数が、上述の『文徳実録』及び、それに先行する三国史におけるそれを遙かに上廻っていることを、先ず指摘しておきたい。そして、この三一例についての「復職期間」の内訳をみるに、「不明」は一〇例（①、③、⑬、⑮、⑰、⑱、⑳、㉑、㉒、㉓の二〇例）あるが、それでもその中には、引用史料自身が一年以内であることを語るもの（⑬）、あるいは「未幾」（①、㉑）、「服中」（⑬）、「服紀未終」（㉒、㉓）、「服紀之中」（㉓）というように、

いまだ服闋以前のこととして、或る程度の期間を想察するものがある。この意味で、その残余の三例（③⑬⑰の三例）のみが、「復職期間」全く不明と看做される事例ということになる。これに対して、「復職期間」を月数単位まで知りうるのが一七例にも上り、この事例数は、優に全事例数（三一例）の過半数を占めている。また、斯うした事例に準ずる「数月」も三例を数える。さらにまた、本書の薨卒記事には「云々」とあって、本文が省略されているとみられる事例が、かなり多く存すること、詳言すれば、同書五十巻中、卷十九貞観十三年四月十三日条所見の從五位下笠朝臣名高卒伝より、以下断続的ではあるが、卷四十八仁和元年十二月十一日条所見の正五位下善淵朝臣永貞卒伝に至るまでに、そうした事例が三五例も存すること、等々をも併せ考えるならば、本書収載の薨卒記事、中に就き、薨卒当事者の官歴の係年月記事の詳細さは、他余の四国史におけるそれに比して、格段に卓越していることを理會しうるのである。これはまた、同書収載の薨卒記事において、薨卒当事者が外官に補任されたにも拘らず、任地へ赴かぬ旨を記す事例が、

①、三月遷任筑前權守。不之任。三年遷左兵衛佐（齊衡二年）  
（從四位下藤原朝臣興邦卒伝貞観5・1・5条）

②、除<sub>二</sub>太宰博士<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>官。承和之初。拜<sub>二</sub>大学直講<sub>一</sub>。(從五位下山口伊美吉西成 卒伝 貞觀6・1・17条)

③、貞觀元年十一月授<sub>二</sub>從五位下<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>次侍從<sub>一</sub>。後拜<sub>二</sub>越後介<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>任。(從五位下高橋朝臣文室麻呂卒伝 貞觀6・2・2条)

④、貞觀三年遷<sub>二</sub>伊予守<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>任。(中略) 六年授<sub>二</sub>從四位上<sub>一</sub>。(從四位上行伊予守豐前王 卒伝 貞觀7・2・2条)

⑤、齊衡中拜<sub>二</sub>越中守<sub>一</sub>。俄而遷<sub>二</sub>加賀守<sub>一</sub>。累歷<sub>二</sub>相摸越前守<sub>一</sub>。並不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>任。(從四位上源朝臣啓卒 伝 貞觀11・8・27条)

⑥、六年遷為<sub>二</sub>美濃權介<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>官。嘉祥二年為<sub>二</sub>越後守<sub>一</sub>。(從五位上菅原朝臣峯嗣 卒伝 貞觀12・3・30条)

⑦、承和十一年授<sub>二</sub>從五位下<sub>一</sub>。拜<sub>二</sub>丹波介<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>任。十二年見<sub>レ</sub>疑<sub>レ</sub>私<sub>レ</sub>通後宮寵姫。出為<sub>二</sub>常陸權介<sub>一</sub>。(從四位下藤原朝臣有貞 卒伝 貞觀15・3・26条)

⑧、嘉祥三年遷<sub>二</sub>安芸守<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>任。天安二年增<sub>二</sub>正五位下<sub>一</sub>。貞觀三年拜<sub>二</sub>右京大夫<sub>一</sub>。(從四位上橘朝臣貞根卒 伝 貞觀15・8・28条)

⑨、十年授<sub>二</sub>從四位下<sub>一</sub>。遷為<sub>二</sub>伊勢守<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>任。(從四位下多治真人貞岑 卒伝 貞觀16・11・9条)

⑩、元慶三年授<sub>二</sub>從四位下<sub>一</sub>。遷<sub>二</sub>陸奥守<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>官。四年出為<sub>二</sub>大和守<sub>一</sub>。(從四位下坂上大宿禰滝守 卒伝 元慶5・11・9条)

⑪、天安之初。大宰大貳正躬王妙選<sub>二</sub>僚屬<sub>一</sub>。請<sub>二</sub>良基与巨勢夏井<sub>一</sub>為<sub>二</sub>少監<sub>一</sub>。良基以<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>其好<sub>一</sub>。鬱々不得<sub>レ</sub>志。不<sub>レ</sub>肯之<sub>レ</sub>任。文德天皇癸<sub>二</sub>盛怒<sub>一</sub>。解<sub>二</sub>却其官<sub>一</sub>。清和天皇登祚。貞觀元年用為<sub>二</sub>木工少允<sub>一</sub>。(從四位下橘朝臣良基卒 伝 仁和3・6・8条)

⑫、六年二月為<sub>二</sub>因播權守<sub>一</sub>。後月遷<sub>二</sub>相摸守<sub>一</sub>。先後不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>任。卷雄奏請<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>罷<sub>一</sub>相摸守。任<sub>二</sub>男一人外吏<sub>一</sub>。詔依<sub>レ</sub>請。以<sub>二</sub>男房典<sub>一</sub>為<sub>二</sub>近江少掾<sub>一</sub>。(從四位上文室朝臣卷雄 卒伝 仁和3・8・7条)

と一二例も存するのに、それに先行する四国史において、斯様な記事を『続日本後紀』に、

。十四年叙<sub>二</sub>從五位下<sub>一</sub>。出<sub>二</sub>下野守<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>任。留任<sub>二</sub>春宮亮<sub>一</sub>。俄遷<sub>二</sub>右少弁<sub>一</sub>。(從三位藤原朝臣常嗣薨 伝 承和7・4・23条)

。八年遷<sub>二</sub>阿波守<sub>一</sub>。是時有識公卿一兩人依<sub>二</sub>詔旨<sub>一</sub>。与<sub>二</sub>諸儒等<sub>一</sub>修<sub>二</sub>撰令義解<sub>一</sub>。真貞亦参<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>赴<sub>二</sub>任所<sub>一</sub>。承和五年授<sub>二</sub>正五位上<sub>一</sub>。(從四位下善道朝臣真貞 卒伝 承和12・2・20条)

。弘仁二年除<sub>二</sub>出羽介<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>国留<sub>レ</sub>京。尋轉<sub>二</sub>駿河介<sub>一</sub>。(從四位上藤原朝臣長岡 卒伝 嘉祥2・2・6条)

の三例、『文徳実録』に、

。齊衡二年正月為<sub>二</sub>下総守<sub>一</sub>。称<sub>二</sub>病篤<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>任。隱居養<sub>レ</sub>痾。有<sub>レ</sub>恩。諸節禄及位禄等。准<sub>二</sub>見任<sub>一</sub>給<sub>二</sub>（從五位上春枝王卒伝 齊衡3・9・13条）

。天安二年三月遷為<sub>二</sub>陸奥權介<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>任卒<sub>二</sub>（從五位下藤原朝臣大滝 卒伝 天安2・6・2条）

の二例の、都合五例しか見出しえぬ処からも追認しうることである。

凡そ、服喪者は、服解により一旦その所帯官職から離れることになるが、服闋後、若しくは服紀中に ①、当該官職に再任されるか、または ②、当該官職以外の官職に新規に補任されるのが、極く普通のケースである。その際、事例数の上で、より多くみられるのは、③でなく④であり、『三代実録』に拠ってこれを窺えば、④の事例は一九例にも上る（同書における全三一例の約六二%を占める）。これを同書では「以<sub>二</sub>本官<sub>一</sub>起<sub>レ</sub>之」（④、⑨、⑫、⑬、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿の二六例）、「復<sub>二</sub>本官<sub>一</sub>」（③の一例）、「起<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>以<sub>二</sub>本官<sub>一</sub>」（⑥の一例）、「復<sub>二</sub>本官治部卿<sub>一</sub>」（⑪の一例）と明記しており、斯うした本官への復任を明確に記す事例は、五国史中、独り同書のみであることも、これを以て同書の薨卒記事における薨卒当事者の官歴記載の詳細さを示す一徴証となしうるのである。

但し、斯うした同書の薨卒記事における薨卒当事者の官歴記載の詳細さを以てしても、某官人の服喪期間中だけに限って、仮令、一時的であるにもせよ、他者がその某官人に成変わり、その職務を全うすべく、当該官職に補任されたことを的確に示す証拠を全く見出しえないのである。

斯様な『三代実録』の薨卒記事における薨卒当事者の服解に関わる官歴の係年月記載の詳細さや、或る意味では、これに齟齬するようにも受け取れる事柄ではあるが、薨卒当事者の服喪期間中、その所帯官職に、仮令、一時的であるにもせよ、他者がその職務を履行すべく、当該官職に補任されたことを的確に示す証拠を見出しえぬのは、独り同書における薨卒記事についてのみならず、自余の諸記事、即ち、いわゆる一般の任官ないしそれに関わる記事についても、齊



しく認められることである。  
(節末付表参照)

					続日本後紀	続日本紀	五国史
					2	1	通番号
<p>8 7 6 5 4 3</p> <p>今 詔起之。</p> <p>從五位下内蔵朝臣高守為<small>ニ</small>備中介<small>一</small>。高守。貞觀二年任<small>ニ</small>備中介<small>一</small>。高守遭<small>ニ</small>母憂<small>一</small>去職。</p> <p>從五位下橘朝臣三夏為<small>ニ</small>大宰少貳<small>一</small>。去七月母喪解官。今 詔以<small>ニ</small>本職<small>一</small>起之。</p> <p>從五位下紀朝臣本道為<small>ニ</small>筑前權守<small>一</small>。本道。天安二年二月拜<small>ニ</small>此職<small>一</small>。丁<small>ニ</small>母憂<small>一</small>去職。今 詔起之。</p> <p>從五位下藤原朝臣三直為<small>ニ</small>安芸介<small>一</small>。三直。貞觀□年拜<small>ニ</small>安芸介<small>一</small>。而会<small>ニ</small>母喪<small>一</small>去官。今 起之。</p> <p>從五位下源朝臣興為<small>ニ</small>筑前守<small>一</small>。興去年正月兼<small>ニ</small>筑前守<small>一</small>。母憂去職。今以<small>ニ</small>本官<small>一</small>起之。</p> <p>存問兼領渤海客使直講荊田・安雄復命奏言。客徒。今月六日解纜飯<small>レ</small>蕃。大内記安倍・清行。去四月丁<small>ニ</small>父憂<small>一</small>去職。故安雄独歸奏事。</p> <p>右近衛中將從四位下源朝臣興為<small>ニ</small>筑前守<small>一</small>。興去年正月兼<small>ニ</small>筑前守<small>一</small>。母憂去職。今以<small>ニ</small>本官<small>一</small>起之。</p>					<p>參議左大弁從三位藤原朝臣常嗣。去年遭<small>ニ</small>母喪<small>一</small>。今日有<small>レ</small>勅。起視事。</p>	<p>正四位上大伴宿禰家持為<small>ニ</small>左大弁兼春宮大夫<small>一</small>。先是遭<small>ニ</small>母憂<small>一</small>解任。至是復焉。</p>	服 解 関 係 記 事
<p>三年</p> <p>貞觀 4・8・17</p>					<p>二年</p> <p>承和 7・2・21</p>	<p>天応 1・8・8</p>	<p>服解を含む任官 再任官の期間</p> <p>収 載 条</p>

三代実録

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
從五位上源朝臣好為 <small>備前守</small> 。好。九年三月任 <small>備前守</small> 。丁 <small>父憂</small> 去職。今詔起之。	外從五位下太朝臣貞長為 <small>參河介</small> 。貞長。九年正月任 <small>參河介</small> 。以 <small>母憂</small> 去職。今詔起之。	從五位下安倍朝臣清行為 <small>大宰少貳</small> 。清行。貞觀六年正月任 <small>大宰少貳</small> 。丁 <small>母憂</small> 去職。今以 <small>本官</small> 起之。	從五位下守内匠頭藤原朝臣維範為 <small>阿波權介</small> 。内匠頭如故。維範。去年兼任 <small>阿波權介</small> 。丁 <small>父憂</small> 解職。今以 <small>本官</small> 起之。	從四位上茂世王為 <small>大宰大貳</small> 。茂世。去年正月任 <small>大宰大貳</small> 。丁 <small>父憂</small> 去職。今詔起之。	從四位上基兄王為 <small>安芸守</small> 。基兄。今年正月拜 <small>安芸守</small> 。丁 <small>母憂</small> 去職。詔以 <small>本官</small> 起之。	以外從五位下忠世宿禰貞直為 <small>薩摩守</small> 。貞直。貞觀四年任 <small>薩摩守</small> 。以 <small>母憂</small> 去職。今詔起之。	以 <small>從五位上</small> 安倍朝臣貞行為 <small>摂津守</small> 。貞行。貞觀三年任 <small>摂津守</small> 。以 <small>母難</small> 解職。今詔起之。	外從五位下三善宿禰清江為 <small>美濃介</small> 。清江。貞觀四年拜 <small>美濃介</small> 。以 <small>父憂</small> 去職。今詔起之。	從五位下滋野朝臣善根為 <small>美濃守</small> 。從五位上滋野朝臣善蔭為 <small>丹波守</small> 。善根。今年為 <small>美濃守</small> 。善蔭。貞觀三年五月為 <small>丹波守</small> 。兄弟並以 <small>母憂</small> 去職。今詔以 <small>本官</small> 起之。

二十五月	二十七月	五十ヶ月	二年	十六ヶ月	四ヶ月	二年	三年	二年	(善蔭)十九ヶ月	(善根)一年
貞觀 11・3・23	貞觀 10・2・17	貞觀 10・1・16	貞觀 9・4・11	貞觀 7・5・16	貞觀 5・8・25	貞觀 5・6・29	貞觀 5・3・19	貞觀 4・12・20		

19	以正六位下行少外記大春日朝臣安守為存問渤海客使。以少内記菅原朝臣道真丁母憂去職也。	貞觀14・1・26
20	廼者少納言正岑王依病不 <sub>レ</sub> 上。和氣朝臣彝範染穢請 <sub>レ</sub> 飯。藤原朝臣高範丁父憂去職。勅以 <sub>レ</sub> 右中弁藤原朝臣良近。行 <sub>レ</sub> 少納言事。為 <sub>レ</sub> 判少納言。	貞觀14・2・15
21	以正六位下行少外記大春日朝臣安守為存問渤海客使以少内記菅原朝臣——丁母憂去職也。	貞觀14・2・26
22	從五位下橘朝臣秋実為美作介。秋実。貞觀十八年拜美作介。丁父憂解職。今奪情起 <sub>レ</sub> 之。	三年 元慶2・4・22
23	以從五位上在原朝臣安貞為撰津守。安貞。貞觀十九年正月任。而丁母艱去職。詔以 <sub>レ</sub> 本官起 <sub>レ</sub> 之。	十九ヶ月 元慶2・7・2
24	從五位上藤原朝臣是行為丹波守。是行。貞觀十七年八月任。而丁母憂解官。今以 <sub>レ</sub> 本官起 <sub>レ</sub> 之。	三十七ヶ月 元慶2・8・14
25	以從五位下橘朝臣貞樹為豐前守。貞樹。去二月丁母憂罷職。今以 <sub>レ</sub> 本官起 <sub>レ</sub> 之。 <small>(越前)</small>	十ヶ月 元慶7・12・28
26	從五位上源朝臣雙為權介。雙。五年二月任。丁母憂解職。今奪情復 <sub>レ</sub> 之。	三十八ヶ月 元慶8・3・9
27	從五位下坂上大宿禰良助為近江大掾。良助。元慶八年任。丁母憂去職。詔以 <sub>レ</sub> 本官起 <sub>レ</sub> 之。	三年 仁和2・5・30
28	從五位下南淵朝臣良臣為阿波介。良臣。元慶八年三月任。遭母憂去職。今奪情起 <sub>レ</sub> 之。	三十六ヶ月 仁和3・2・17
29	前參議正四位下源朝臣光。正月十九日丁母憂去職。是日有 <sub>レ</sub> 勅。以 <sub>レ</sub> 本官起 <sub>レ</sub> 之。	二ヶ月(七十日) 仁和3・3・29

(備考) 19と21は同事重出。服解関係記事数を問題としているので、これら両者をもとに採り上げた。1と29のうち、3以外の二十八例は、すべて任官ないし、それに関わる記事である。服解を含む任官ノ再任官の期間欄における年数は足掛け年数、月数は実月数である。

#### 四 所生母の記載

五国史所見の薨卒記事において、通常、薨卒当事者が皇（太）子・皇女・（内）親王、即ち天皇御子である場合、その所生母の出自を最も詳細に記すこと周知の通りである。そこで、ここでは、件の記事のあり様について検討を加えてみよう。

はじめに、五国史所見の当該記事の全事例を掲げることとする。

							五国史
7	6	5	4	3	2	1	通番号
但馬内親王	忍壁親王	大伯内親王	明日香皇女	大江皇女	新田部皇女	弓削皇子	薨去者△皇 ・(太)子・皇女 ・(内)親王▽
							所生母の出自記事
和銅	慶雲	大宝	〃	〃	〃	文武	収載条
1・6・25	2・5・7	1・12・27	4・4・4	3・12・3	3・9・25	3・7・21	

		紀 本 日 統																			
27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8		
大田親王	大徳親王	稗田親王	能登内親王	坂合部内親王	難波内親王	衣縫内親王	室内親王	多紀内親王	安積親王	長谷部内親王	水主内親王	舍人親王	新田部親王	泉内親王	聖武皇太子	田形内親王	志貴親王	穗積親王	長親王		
		<div>母夫人正三位眞犬養宿禰広刀自。從五位下唐之女也。</div> <div>天皇同母姉也。</div>																			
大同	延暦	〃	天応	〃	〃	宝龜	宝字	天平	勝宝	天平	〃	〃	〃	〃	〃	天平	〃	神龜	〃	〃	靈龜
3・3・27	22・10・25	1・12・17	1・2・17	9・5・27	4・10・14	3・7・9	3・11・11	3・1・25	3・1・13	16・閏1・13	13・3・28	9・8・20	7・11・14	7・9・30	6・2・8	5・9・13	5・3・5	2・8・11	1・7・27	1・6・4	

			日本後紀																			
47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28			
叡努内親王			春日内親王	基良親王	基子内親王	万多親王	酒人内親王	俊子内親王	恒世親王	佐味親王	菅原内親王	因幡内親王	駿河内親王	坂本親王	朝原内親王	甘南備内親王	業子内親王	布勢内親王	高志内親王			
母紀氏。從三位木津魚朝臣之女。從五位下魚員是也。						母中務大輔藤原朝臣鷲取女也。			母贈皇后。			母百濟氏。			母贈太政大臣藤原朝臣種繼之女也。		母曰三品高津内親王。		母丸朝臣氏。		皇帝同母妹也。	
母紀氏。贈正二位右大臣船守朝臣之女。從四位下若子是也。																						
贈皇后所誕育也。																						
承和	弘仁	天長	9	8	8	7	6	3	3	2	2	1	11	9	8	8	6	3	4			
1	1	1	12	6	3	4	8	6	5	閏7	閏7	9	6	11	4	2	6	8	5			
14	22	13	24	14	20	21	20	8	1	16	6	26	20	5	25	21	24	6	7			

文 德 実 録								統 日 本 後 紀											
67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48
明子内親王 宗子内親王 葛原親王 齊子内親王 成康親王 繁子内親王 親子内親王 葛井親王								秀子内親王 大宅内親王 崇子内親王 良貞親王 有智子内親王 時子内親王 石上内親王 阿保親王 恒統親王 安濃内親王 高津内親王 芳子内親王											
母右大臣正二位清原真人夏野之女春子也。								嵯峨太皇太后所誕第五皇女也。 納從三位坂上大宿禰苅田麻呂女從五位下全子所誕也。 母多治比氏。參議從三位長野真人之女。贈正二位真宗真人是也。 太皇太后之所産也。 母葛井氏焉。											
母從四位上高階真人淨階之女。從五位上河子也。								天皇之皇女也云々。 先太上天皇幸姬王氏所誕育也。											
母夫人多治氏。								母橘氏云々。 母橘氏。正五位下嶋田麿之女。從三位常子是也。 今上之同産也。											
母正五位下文室真人久賀麻呂之女。從五位上文子也。								母大納言贈正二位坂上大宿禰田村麻呂之女。從四位下春子也。											
母右大臣從二位藤原朝臣三守之女。贈從二位貞子也。																			
母太皇太后也。																			
母藤原氏。																			
仁寿								嘉祥											
1・9・5	1・3・20	3・6・4	3・5・16	3・4・18	1・12・9	1・9・18	3・4・2	3・2・25	2・2・14	15・5・15	15・5・6	14・10・26	14・2・12	13・9・26	9・10・22	9・3・16	8・8・30	8・4・17	5・12・26

三代實錄																			
86	85	84	83	82	81		80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68
真子內親王	基貞親王	柔子內親王	池上內親王	惟條親王	宗康親王		業良親王	仲野親王	高子內親王	大井內親王	重子內親王	善原內親王	純子內親王	大原內親王	有子內親王	伊登內親王	同子內親王	滋野內親王	安勅內親王
母正五位上紀朝臣種子。正四位下名虎之女也。																	母從四位上藤原朝臣大繼之女從四位下河子也。		
母嵯峨太上天皇皇女諱正子。																	母大納言正三位勲四等藤原朝臣小黒麻呂之女。正五位下上子也。		
母參議正四位下滋野朝臣貞主之女。從四位上繩子也。																	母池子。丹墀氏。從五位上門成之女也。		
母橘氏。從四位下入居之女也。名曰田村子。																	母藤原氏。從三位乙叡之女也。		
母贈皇后沢子。贈太政大臣總繼之女。与光孝天皇同胞也。																	母贈皇后。諱高。桓武天皇之女也。		
																	母正四位下勲四等伊勢朝臣老人之女。贈從三位繼子也。		
																	母正五位下文室真人久賀麻呂之女文子。		
																	母從四位上藤原朝臣大繼之女。從四位下河子焉。		
																	母從五位下藤原朝臣道長之女也。		
																	母從四位下藤原朝臣河子。從四位上大繼之女也。		
																	母百濟王氏。從五位上教俊之女也。		
																	母從四位下藤原朝臣河子。從四位上大繼之女。		
																	母三品高津內親王。桓武天皇納從三位坂上大宿禰苅田磨女從五位下全子。所誕育也。		
12・5・5	11・9・21	11・2・28	10・11・23	10・9・14	10・6・11		10・1・11	9・1・17	8・6・16	7・11・28	7・7・2	5・7・21	5・1・21	5・1・19	4・2・25	3・9・19	貞觀2・閏10・20	天安1・4・7	2・9・17



102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87
紀内親王	氏子内親王	恒貞親王	惟彦親王	巨勢親王	高丘親王	慧子内親王	儀子内親王	玠子内親王	平子内親王	久子内親王	忠良親王	賀案内親王	人康親王	賀陽親王	勝子内親王
<p>母從四位下藤原朝臣河子。從四位上大繼之女。内親王与仲野親王同産也。</p> <p>母贈皇后<small>高</small>諱<small>志</small>。即是太上天皇之庶妹也。</p> <p>母太皇太后諱正子。嵯峨太上天皇之女焉。</p> <p>母滋野朝臣氏。参議正四位下貞主之女也。</p> <p>母贈從三位伊勢朝臣繼子。正四位下勲四等老人之女也云々。</p> <p>母從五位上藤原朝臣是雄之女也。</p> <p>云々……清和太上皇同産之妹也。</p> <p>云々……母從五位上紀朝臣静子。正四位下名虎之女也。</p> <p>母贈從二位藤原朝臣女。</p> <p>云々。</p> <p>云々。</p> <p>云々。</p> <p>云々……与光孝天皇同胞也。</p> <p>云々。</p> <p>云々母参議滋野朝臣貞主女也。</p>															
元慶	仁和	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
2・6・29	1・4・2	8・9・20	7・1・29	6・8・5	5・10・13	5・1・6	3・閏10・5	1・4・24	1・2・10	18・6・18	18・2・20	16・2・3	14・5・5	13・10・8	13・7・28

(備考) 所生母の出自記事中の傍二重線部分は生母名であり、傍波線部分は本文省略を示すとみられる「云々」である。また、『日本後紀』における26、44の二名中、29、30の二名を除く一七名の薨去者及びそれらの一部の者に関わる若干の所生母の出自記事と、『三代実録』における所生母の出自記事中の傍線部分のそれとは、各々『日本紀略』に拠って補ったものである。

これにより、薨去者の生母名（傍二重線部分）を記すのは『続日本紀』に一例（18の一例）、『日本後紀』に二例（30、32の二例）、『続日本後紀』に五例（45、47、49、50、58の五例）、『文徳実録』に七例（60、63、64、66、69の七例）、『三代実録』に二〇例（70、72、75、77、79、86、94、97、98、100、102の二〇例）存することが分かる。而してこれら事例数の、皇（太）子・皇女・（内）親王薨去記事合計数に占める百分比を各五国史毎に検すると、『続日本紀』が四％、『日本後紀』が約一〇・五％、『続日本後紀』が約三八・五％、『文徳実録』が七〇％、『三代実録』が約七六・九％となる（表六〇参照）。この数値は、本文省略を示すとみられる云々を含み、しかも、そこに生母名のみえぬ事例（『続日本後紀』の二例八五、五七、『三代実録』の七例八七、九二、九五）を除外して算出したものである。

兎も角も、以上の検討により、完成奏上時が降れば降るほど、上記の百分比が高率となっていること、つまり、五国史中、『三代実録』において、件の百分比が最も高率をマークしていることを明らかにしうるのである。

右に述べたところは、薨卒当事者が皇（太）子・皇女・（内）親王の場合についてであるが、それ以外に、やはり薨卒当事者の生母名を記す事例があるや否やを検索してみると、左記のような結果が得られる。

続日本紀					五国史
5	4	3	2	1	通番号
藤原朝臣乙叡	皇后（乙牟漏）	皇太后（新笠）	藤原朝臣永手	天平応真正皇太后（光明）	薨卒者
母尚侍百濟王明信。	母尚侍贈從一位阿倍朝臣古美奈。	母贈正一位大枝朝臣真妹。	母曰正二位牟漏女王。	母曰贈正一位県犬養橘宿禰三千代。	有生母名記事
大同 3・6・3	“ 9・閏3・28	延暦 9・1・15	宝龜 2・2・22	天平 宝字 4・6・7	収載条

日本後紀		三代実録	
6	7	8	9
橘朝臣安麻呂	文室真人弟直	源朝臣定	在原朝臣業平
母從三位大原真人明娘也。	母從四位下平田孫王。	母百濟王氏。其名曰慶命。 阿保親王娶桓武天皇女伊登内親王。生業平。	
弘仁 12・7・11	天長 7・閏12・18	貞観 5・1・3	元慶 4・5・28

即ち『続日本紀』に四例(1・4)、『日本後紀』に三例(5・7)、『三代実録』に二例(8・9)の都合九例見出せるのである。このうち、皇后・皇太后を三例(1・3・4)含むが、これを父系出自の面からみれば、皇子<sup>(賜姓源氏)</sup>一例(8)、皇孫<sup>(賜姓源氏)</sup>一例(9)、文室真人氏一例(7)、橘氏一例(6)、藤原氏四例(1、2、4、5)、高野氏一例(3)、となり、藤原氏が半数近くを占めていることが分かる。これのみを以てしても、同氏の国史への関わり方の深さを窺知しうるのである。

それはともかくとして、先に触れた皇(太)子・皇女・(内)親王の場合と、いま述べたそれ以外の九事例の場合との双方を合算し、それらが薨卒記事合計数に如何なる比率を占めているかを、各五国史別に調査した結果を示すのが(表七)である。これにより、『続日本紀』が約一・六%、『日本後紀』が約二・八%、『続日本後紀』が約五・三%、『文徳実録』が約八・八%、『三代実録』が約一一・八%となり、この百分比においても、完成奏上時が降れば降るほど高率を示している、とした先の指摘の妥当性が追認されるのである。

斯くして五国史所見の薨卒記事中、『三代実録』のそれが、薨卒当事者——取り分け、天皇御子たる皇(太)子・皇女・(内)親王の所生母の記載面において、最も卓越している事実を明らかにしうるのである。

〈表六〉

諸項目	五国史		
	a、有生母名記事合計数	b、皇(太)子・皇女・(内)親王薨去記事合計数	$\frac{a}{b} \times 100$
続日本紀	一	二五	四%
日本後紀	二	一九	約一〇・五%
続日本後紀	五	一五(二三)	約三八・五%
文徳実録	七	一〇	七〇%
三代実録	二〇	三三(二六)	約七六・九%

(備考) 括弧内数字は云々を含むものを差引いた事例数である。但し、云々を含むとはいへ、生母名を記す事例の場合は、そのかぎりでない。『続日本後紀』と『三代実録』の百分比は、各々括弧内数字に基づいて算出した。aはあくまでもbにおけるものである。

〈表七〉

諸項目	五国史		
	a、有生母名記事合計数	b、薨卒記事合計数	$\frac{a}{b} \times 100$
続日本紀	五	三〇二	約一・六%
日本後紀	五	一七九	約二・八%
続日本後紀	五	九五	約五・三%
文徳実録	七	八〇	約八・八%
三代実録	二二	一八七	約一一・八%

## 五 賜氏姓の記載

薨卒記事において、薨卒当事者の父祖ないし本人への賜氏姓を記している事例を、五国史について一渉り検索してみると、左記の三〇例を挙げることが出来る（但し、ここには僧侶寂。伝は含まれていない）。

### 〈『続日本紀』〉

①、正二位<sup>△△</sup>広岡朝臣古那可智<sup>△△</sup>薨伝……天平勝宝九歲閏八月十六日。有<sup>レ</sup>勅賜<sup>△△</sup>姓<sup>△△</sup>広岡朝臣<sup>△△</sup>〔<sup>△△</sup>広岡<sup>△△</sup>天平勝宝九歲朝臣<sup>△△</sup>同右〕（天平宝字

3・7・5条）

②、從三位藤原朝臣弟貞<sup>△△</sup>薨伝……弟貞者平城朝左大臣正二位長屋王子也……勝宝八歲。安宿。黄文謀反。山背王

陰上<sup>△△</sup>其變<sup>△△</sup>。高野天皇嘉<sup>△△</sup>之。賜<sup>△△</sup>姓<sup>△△</sup>藤原<sup>△△</sup>。名曰<sup>△△</sup>弟貞<sup>△△</sup>〔<sup>△△</sup>藤原<sup>△△</sup>勝宝八歲朝臣<sup>△△</sup>不明記〕（天平宝字7・10・17条）

③、從四位下上道朝臣正道卒伝……勝宝九歲。以<sup>△△</sup>告<sup>△△</sup>橘奈良麻呂密。授<sup>△△</sup>從四位下<sup>△△</sup>。賜<sup>△△</sup>姓<sup>△△</sup>朝臣<sup>△△</sup>〔<sup>△△</sup>上道<sup>△△</sup>不明記朝臣<sup>△△</sup>勝宝九歲〕（神護

景雲1・9・23条）

④、從四位下高丘宿禰比良麻呂卒伝……父榮浪河内。正五位下大学頭。神龜元年。改為<sup>△△</sup>高丘連<sup>△△</sup>。宝字八年。以<sup>△△</sup>告<sup>△△</sup>

仲滿反<sup>△△</sup>授<sup>△△</sup>從四位下<sup>△△</sup>。景雲元年賜<sup>△△</sup>姓<sup>△△</sup>宿禰<sup>△△</sup>〔<sup>△△</sup>高丘<sup>△△</sup>神龜元年宿禰<sup>△△</sup>景雲元年〕（神護景雲2・6・28条）

⑤、正四位下大和宿禰長岡卒伝……刑部少輔從五位上五百足之子也……勝宝年中。改<sup>△△</sup>忌寸<sup>△△</sup>賜<sup>△△</sup>宿禰<sup>△△</sup>〔<sup>△△</sup>大和<sup>△△</sup>不明記宿禰<sup>△△</sup>同右〕

（神護景雲3・10・29条）

⑥、從四位上<sup>△△</sup>大津連大浦卒伝……大浦者世習<sup>△△</sup>陰陽<sup>△△</sup>。仲滿甚信<sup>△△</sup>之。問以<sup>△△</sup>事之吉凶<sup>△△</sup>。大浦知<sup>△△</sup>其指意涉<sup>△△</sup>於逆謀<sup>△△</sup>。恐<sup>△△</sup>禍及<sup>△△</sup>己<sup>△△</sup>。密告<sup>△△</sup>其事<sup>△△</sup>。居未<sup>△△</sup>幾。仲滿果反。其年授<sup>△△</sup>從四位上<sup>△△</sup>。賜<sup>△△</sup>姓<sup>△△</sup>宿禰<sup>△△</sup>……神護元年。以<sup>△△</sup>党<sup>△△</sup>和氣王<sup>△△</sup>。除<sup>△△</sup>宿禰

姓。左遷日向守。尋解見任。即留彼國。宝龜初。原罪入京。任陰陽頭。〔大津〕不明記 (宝龜6・5・17条)

⑦、正二位吉備朝臣真備薨伝……天平七年歸朝。授正六位下。拜大学助。高野天皇師之。受礼記及漢書。恩寵甚渥。賜姓吉備朝臣。累遷。七歲中。至從四位上右京大夫兼右衛士督。〔吉備〕天平七年朝臣同右 (宝龜6・10・2条)

⑧、正二位文室真人邑珍薨伝……勝宝四歲賜姓文室真人。〔文室〕勝宝四歲真人同右 (宝龜11・11・28条)

⑨、正三位石上大朝臣宅嗣薨伝……宅嗣左大臣從一位麻呂之孫。中納言從三位弟麻呂之子也……宝龜初。出為大宰帥。居無幾遷式部卿。拜中納言。賜姓物部朝臣。以其情願也。尋兼皇太子傳。改賜姓石上大朝臣。十一年。

轉大納言。〔石上〕不明記大朝臣同右 (天応1・6・24条)

⑩、正四位上道嶋宿禰嶋足卒伝……嶋足本姓牡鹿連。八年惠美訓儒麻呂之劫勅使也。嶋足与將監坂上苅田麻呂。奉詔疾馳。射而殺之。以功擢授從四位下勲二等。賜姓宿禰。補授刀少將兼相摸守。轉中將。改本姓賜道嶋宿禰。尋加正四位上。〔道嶋〕不明記宿禰宝字八年 (延曆2・1・8条)

⑪、從四位下淡海真人三船卒伝……宝字元年。賜姓淡海真人。〔淡海〕宝字元年真人同右 (延曆4・7・17条)

⑫、從三位坂上大宿禰苅田麻呂薨伝……正四位上犬養之子也。八年。惠美仲麻呂作逆。先遣其息訓儒麻呂邀奪鈴印。苅田麻呂与將曹牡鹿嶋足。共奉詔載馳。射訓儒麻呂而殺之。以功授從四位下勲二等。賜姓大忌寸。補中衛少將。〔坂上〕不明記大宿禰同右 (延曆5・1・7条)

⑬、正二位大中朝臣清麻呂薨伝……曾祖国子小治田朝小德冠。父意美麻呂中納言正四位上……景雲二年拜中納言。優詔賜姓大中臣。〔大中臣〕景雲二年朝臣不明記 (延曆7・7・28条)

⑭、贈正三位和氣朝臣清麻呂薨伝……宝龜元年聖帝踐祚。有勅入京。賜姓和氣朝臣〔和氣朝臣同右〕〔延曆18・2・21条〕

〈『続日本後紀』〉

⑮、散位從四位下善道朝臣貞貞卒伝……〔天長〕五年上表。賜姓善道朝臣〔善道朝臣同右〕〔承和12・2・20条〕

〈『文德実録』〉

⑯、正四位下南淵朝臣永河卒伝……〔弘仁十四〕同年十二月与兄正五位下弘貞。陳父先志。賜姓南淵朝臣〔南淵朝臣同右〕〔天安1・10・13条〕

⑰、散位從四位上清原真人有雄卒伝……〔嘉祥〕三年為肥後守。上奏改王号。賜清原真人姓〔清原真人同右〕〔天安1・12・25条〕

〈『三代実録』〉

⑱、從四位上行摂津守滋野朝臣貞雄卒伝……父從五位上家詔。延曆十七年改伊蘇志臣。賜滋野宿禰。弘仁十四年改宿禰。賜朝臣〔滋野朝臣同右〕〔貞觀1・12・22条〕

⑲、從五位下大神朝臣虎主卒伝……虎主。本姓神直。成名之後。賜姓大神朝臣〔大神朝臣同右〕〔貞觀2・12・29条〕

⑳、從四位上清原真人岑成卒伝……至〔天長〕十年六月。賜姓清原真人〔清原真人同右〕〔貞觀3・2・29条〕

㉑、正五位上豐階真人安人卒伝……本姓河俣公。延曆十九年。河俣公御影。改姓豐階公……仁寿二年安人上疏言。

安人貫河内国。未除公字。伏請移籍京華。亦為真人。於是詔賜姓真人。貫於京地。〔豐階、延曆十九年、真人、仁壽二年〕（貞觀3・

9・24条）

22、從五位下讚岐朝臣永直卒伝……本姓讚岐公……〔承和元〕是年兼勘解由次官。三年賜姓朝臣。〔讚岐、不明記、朝臣、承和三年〕（貞觀4・

8是月条）

23、正三位源朝臣定薨伝……弘仁五年。特蒙明詔。諸皇子未為親王者。皆賜姓源朝臣。〔源、弘仁五年、朝臣、同右〕（貞觀5・

1・3条）

24、從五位上滋善宿禰宗人卒伝……仁壽二年賜滋善宿禰。改本属隸於左京。〔滋善、仁壽二年、宿禰、同右〕（貞觀5・1・20条）

25、正三位源朝臣弘薨伝……弘仁五年賜姓源朝臣。〔源、弘仁五年、朝臣、同右〕（貞觀5・1・25条）

26、從三位春澄朝臣善繩薨伝……五年賜姓春澄宿禰。兄弟姊妹五人同以預之。後改宿禰為朝臣。〔春澄、天長五年、朝臣、不明記〕

（貞觀12・2・19条）

27、從五位下清内宿禰雄行卒伝……本姓凡河内忌寸。後賜清内宿禰姓。〔清内、不明記、宿禰、同右〕（元慶7・6・10条）

28、從五位上紀朝臣安雄卒伝……安雄父本姓苅田首。讚岐国人。至于安雄。賜姓紀朝臣。〔紀、不明記、朝臣、同右〕（仁和2・5・

28条）

29、從四位上源朝臣行有卒伝……天皇賜行有姓源朝臣。〔源、不明記、朝臣、同右〕（仁和3・6・20条）

30、從四位上文室朝臣卷雄卒伝……先祖本姓文室真人。中間為三諸朝臣。至于綿麻呂。大同四年賜文室朝臣姓。

也。〔文室、大同四年、朝臣、同右〕（仁和3・8・7条）

このうち、特に薨卒当事者の父祖ないし本人への賜氏姓年次が明確に示されている〔以下、これを「賜氏姓年次明確事例」と仮称する。〕のは、『続日

本紀』に五例（①、④、⑦、⑧、⑪の五例）、『日本後紀』に一例（⑭の一例）、『続日本後紀』に一例（⑮の一例）、『文徳実録』





約し、なお言えば、規定することもある程までに、その「為人」の形成と、その表出に大きく関わる処の、美的対象を觀照し判定する能力の意たる所謂好尚・趣味について、それが、特に「好」字を以て具体的に表現されている事例に限って考えたい。

先ず、そうした事例を五国史中に検索して、その関係資料を抽出列挙するとともに、後述の如き分類記号を付記し、さらに、それを分かり易くまとめて「表八」として示すこととする。

凡そ、「好」字を以て記されている処の、某薨卒当事者の好尚・趣味と言っても、それを仔細に眺めれば、その意味する攸、実に広範、且つ複雑多岐に亙るものが多いだけに、いまは、そうした事例を、その内容如何を適宜に吟味して、文事・学芸に関わるもの(A)、武事・武芸に関わるもの(B)、芸能・雑芸・風流韻事に関わるもの(C)、その他(D)、といった程度に分類しておこう

# 『続日本紀』

(1) 放縦不<sub>レ</sub>拘。頗好<sub>ニ</sub>酒色<sub>一</sub> (從三位百濟王敬福薨伝 天平神護2・6・28条) …………… D

(2) 少好<sub>ニ</sub>刑名之学<sub>一</sub>。兼能属<sub>レ</sub>文 (正四位下大和宿禰長岡卒 伝 神護景雲3・10・29条) …………… A

(3) 愛<sub>ニ</sub>尚經史<sub>一</sub>。多<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>涉覽<sub>一</sub>。好<sub>ニ</sub>属<sub>レ</sub>文<sub>一</sub>。工<sub>ニ</sub>草隸<sub>一</sub> (正三位石上大朝臣宅嗣 薨伝 天応1・6・24条) …………… A

(4) 性識聰敏。涉<sub>ニ</sub>覽群書<sub>一</sub>。尤好<sub>ニ</sub>筆札<sub>一</sub> (從四位下淡海真人三船 卒伝 延暦4・7・17条) …………… A

(5) 利口剖断無<sub>レ</sub>滯。然性頗偏急。好<sub>ニ</sub>詰<sub>ニ</sub>人之過<sub>一</sub> (從三位石川朝臣名足薨 伝 延暦7・6・10条) …………… D

# 『日本後紀』

(1) 性好<sub>ニ</sub>琴歌<sub>一</sub>。无<sub>ニ</sub>他才能<sub>一</sub> (正四位上大中臣朝臣諸魚 卒伝 延暦16・2・21条) …………… C

- (2) 宿衛不怠。好愛鷹犬。多得士卒心。(從四位下住吉朝臣綱主 卒伝 延暦24・2・10条) D
- (3) 性頑驕好妾。(從三位藤原朝臣乙叡薨 伝 大同3・6・3条) D
- (4) 乏文堪武。性好犬。高直有耿介之節。(正四位下安倍朝臣兄雄 卒伝 大同3・10・19条) D
- (5) 為性愚鈍(中略)唯好酒色。更無餘慮。(從四位下藤原朝臣纒麻呂 卒伝 弘仁12・9・21条) D
- (6) 才能不聞。武芸小得。好酒及鷹。老而弥篤。(從四位下藤原朝臣道繼 卒伝 弘仁13・2・24条) D
- (7) 不護礼度。雖好仙道。控地不登。(從四位下藤原朝臣友人 卒伝 弘仁13・8・16条) A
- (8) 頗便步射。好鷹犬。為人疾惡。(從四位下伴宿禰弥嗣卒 伝 弘仁14・7・22条) D
- (9) 容儀閑雅。頗好女色。(四品佐味親王卒伝 天長2・閏7・16条) D

『続日本後紀』

- (1) 好属文。兼能隸書。(從三位藤原朝臣常嗣薨 伝 承和7・4・23条) A
- (2) 好射。兼善琴歌。(從三位藤原朝臣繼業薨 伝 承和9・7・5条) B
- (3) 頗有武芸。最好鷹犬。(從四位上伴宿禰友足卒 伝 承和10・1・5条) B
- (4) 雖素無文学。且好鷹犬。而砥礪從公。夙夜匪懈。(從四位下大野朝臣真鷹 卒伝 承和10・2・3条) D
- (5) 欲立功名。好施異治。(從四位下良岑朝臣木連 卒伝 嘉祥2・6・28条) D

『文德実録』

- (1) 耽愛声乐。殊翫絲管。晚年好酒。志在讌樂。(三品葛井親王薨伝 嘉祥3・4・2条) D

- (2) 性好。閑退。常在東山旧居。耽愛林泉。(中略) 尤好。鼓琴。(從五位下藤原朝臣関雄 卒伝 仁寿3・2・14条) …………… D・C
- (3) 性甚畏雷。不留意小芸。唯好。困碁。(從五位下和氣朝臣貞臣 卒伝 仁寿3・4・14条) …………… D
- (4) 性懶。文書。好。習。射芸。(從四位上源朝臣安卒 伝 仁寿3・4・18条) …………… B
- (5) 不解。文書。好在。鷹犬。(從四位下橘朝臣百枝卒 伝 齊衡1・4・2条) …………… D
- (6) 天性羸弱。惡。當。風雨。(中略) 頗好。鷹犬。不敢出遊。(從四位下当世王卒伝 齊衡2・8・13条) …………… D

『三代実録』

- (1) 性寡。嗜欲。不。貪。財利。唯馬是好。時々觀之。(從四位上藤原朝臣春津 卒伝 貞觀1・7・13条) …………… D
- (2) 少好。学。頗有。文情。尤善。草隸。(從五位上小野朝臣恒柯 卒伝 貞觀2・5・18条) …………… A
- (3) 服飾之美。最究。鮮明。所。好。唯馬。退。公之後。每為。愛玩。(從四位下藤原朝臣良仁 卒伝 貞觀2・8・5条) …………… D
- (4) 性好。戲謔。最為。滑稽。与。人言談。必以。對事。(從五位下大神朝臣虎主 卒伝 貞觀2・12・29条) …………… D
- (5) 以。好。学。早知。名。涉。讀史伝。最精。漢書。(正五位上豐階真人安人 卒伝 貞觀3・9・24条) …………… A
- (6) 好。讀。律令。性甚聰明。一聽暗誦。(從五位下讃岐朝臣永直 卒伝 貞觀4・8・是月条) …………… A
- (7) 愛。好。音樂。家庭常置。鼓鐘。退。公之後。必令。舉而觀之。(正三位源朝臣定覺伝 貞觀5・1・3条) …………… C
- (8) 幼而聰警。好。讀。經史。尤善。隸書。(中略) 最好。学。(中略) 尋讀不倦。兼好。絲竹。每。退衙之閑。以。琴書。自娛。(正三位源朝臣弘範伝 貞觀5・1・25条) …………… A・A・C
- (9) 幼。懶。讀書。好。習。射芸。逮。于成人。改。節入。学。以。春秋。名家。(從五位下山口伊美吉西成 卒伝 貞觀6・1・17条) …………… B
- (10) 少好。武事。便。弓馬。最善。射。兼有。才調。(從五位上坂上大宿禰当道 卒伝 貞觀9・3・9条) …………… B

- (11) 幼而聡悟。好<sub>レ</sub>読<sub>二</sub>書伝<sub>一</sub>。(正三位平朝臣高棟薨 伝 貞観9・5・19条) …………… A
- (12) 少耽<sub>二</sub>愛音楽<sub>一</sub>。好<sub>二</sub>学<sub>二</sub>鼓琴<sub>一</sub>。尤善彈<sub>二</sub>琵琶<sub>一</sub>。(從五位上藤原朝臣貞敏 卒 貞観9・10・4条) …………… C
- (13) 愛<sub>二</sub>好<sub>二</sub>文学之士<sub>一</sub>。挾<sub>二</sub>大学中貧寒之生<sub>一</sub>。時賜<sub>二</sub>綿絹<sub>一</sub>。(正一位藤原朝臣良相薨 伝 貞観9・10・10条) …………… D
- (14) 尤好<sub>二</sub>老莊<sub>一</sub>諸道人等受<sub>二</sub>其訓説<sub>一</sub>。(從五位上滋野朝臣安城 卒 貞観10・6・11条) …………… A
- (15) 風尚不<sub>レ</sub>恒。好<sub>二</sub>読<sub>二</sub>書伝<sub>一</sub>。兼善<sub>二</sub>草隸<sub>一</sub>。(正二位源朝臣信覺 貞観10・閏12・28条) …………… A
- (16) 尤好<sub>二</sub>文章<sub>一</sub>。兼善<sub>レ</sub>射。有<sub>二</sub>音儀<sub>一</sub>。能<sub>レ</sub>歌。(從四位上源朝臣啓卒 伝 貞観11・8・27条) …………… A
- (17) 能<sub>二</sub>射芸<sub>一</sub>。好<sub>二</sub>引<sub>二</sub>強弓<sub>一</sub>。人無<sub>二</sub>能及者<sub>一</sub>。(從四位上清原真人秋雄 卒 貞観16・4・24条) …………… B
- (18) 好<sub>二</sub>武事<sub>一</sub>。便<sub>二</sub>弓馬<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>進趣之志<sub>一</sub>。(從五位上坂上大宿禰貞守 卒 貞観18・9・9条) …………… B
- (19) 好<sub>二</sub>武芸<sub>一</sub>。膂力過<sub>レ</sub>人。甚有<sub>二</sub>胆氣<sub>一</sub>。(從四位上藤原朝臣良尚 卒 元慶1・3・10条) …………… B
- (20) 幼好<sub>二</sub>武芸<sub>一</sub>。便習<sub>二</sub>弓馬<sub>一</sub>。尤善<sub>二</sub>步射<sub>一</sub>。(從四位下坂上大宿禰滝守 卒 元慶5・11・9条) …………… B
- (21) 性聡明。多涉<sub>二</sub>内典<sub>一</sub>。兼好<sub>二</sub>老莊<sub>一</sub>。(僧由連卒 和2・7・4条) …………… A

右掲事例を分かり易くまとめて示した〈表八〉により、次のような事柄を明らかにしうる。即ち「好」字使用の好尚・趣味記事数(以下、これを<sub>b</sub>と仮称する)の、収載薨卒記事数に占める百分比(但し、『文徳実録』『三代実録』両書の場合は、「好」字の実際の使用事例数の、収載薨卒記事数に占める百分比)についてみると、『続日本紀』が約一・七%、『日本後紀』が約五・〇%、『続日本後紀』が約五・三%、『文徳実録』が約八・八%、『三代実録』が約一二・三%となつて、ここでも、完成奏上時が降れば降るほど、その百分比が高率になっていること。従つて、五国史中、件の百分比が最も高率をマークしているのは、『三代実録』ということになる。そして、好尚・趣味の分類A・Cの記事数の、分類A・Dの記事数、つまり<sub>b</sub>に占める百分比に目を遣ると、『続日本紀』は六〇%、『日本後紀』は約二二%、『続日本後紀』は六〇%、『文徳実録』は約二九%、『三代実録』は約八三%となり、五国史中、『三

〈表八〉

諸項目	a、収載薨卒記事数	b、「好」字使用の好尚・趣味記事数	好尚・趣味の分類				当事者階位の品・薨卒の			
			A	B	C	D	二 位	三・四(品) 位	五 位	その他
五国史	続日本紀	三〇二 五 (約一・七%)	三			二		五		
	日本後紀	一七九 九 (約五・〇%)	一		一	七		九		
	続日本後紀	九五 五 (約五・三%)	一	二		二		五		
	文徳実録	八〇 六(七) (約八・八%)		一	一	五		四	二 (約三三%)	
	三代実録	一八七 二二(二三) (約一二・三%)	一〇	六	三	四	二	九	九 (約四三%)	一

(備考) bの欄における( )内百分比は $\frac{b}{p} \times 100$ に拠り算出したもの、( )内数字は「好」字の実際の使用事例数(これを仮にcと呼ぶ)、( )内百分比は $\frac{c}{p} \times 100$ に拠り算出したもの、五位の欄における( )内百分比はbに占めるものである。

代実録』が格段に高く、それに『続日本紀』『続日本後紀』両書が同率でつぎ、以下、『文徳実録』『日本後紀』の順に続いていることが知られる。仍って『三代実録』における分類A、Cの記事数の卓越さを理會しうるが、この『三代実録』においては、とくに分類Aの事例数の多さが目を引く。また、同書における分類A、C、Dに関わる処の、某薨卒当事

者の私生活での好尚・趣味を記載するに際し、「退<sub>レ</sub>公之後」(③・⑦)「每<sub>ニ</sub>退<sub>レ</sub>衙之閑」(⑧)と表現しているのは、「安仁退<sub>レ</sub>衙之後。必<sub>ニ</sub>詣<sub>ニ</sub>嵯峨<sub>一</sub>」(正三位安倍朝臣安仁貞觀1・4・23案)とあることとともに、本書ならではの表現様態として旁注意されてよい。さらに、好尚・趣味の記載を、その薨卒当事者の品・位階の上から眺めてみると、『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』の三書には、五位の者のそれはみられず、それがみえるのは、『文徳実録』『三代実録』両書のみであり、この両書にあって、五位の者の事例数の、bに占める百分比に注目すると、前書が約三三%、後書が約四三%となって、後書即ち『三代実録』が、前書即ち『文徳実録』よりも遥かに高率を示していることが分かる。故に、五国史所見の薨卒記事中、五位の薨卒当事者にして、「好」字使用の好尚・趣味の記載が最も卓越しているのは、『三代実録』のそれであることを明らかにしうるのである。

#### おわりに

以上、『三代実録』の史書としての性格ないし特色の一端を明らかにすべく、その薨卒記事の記載様態につき、一、所生子の記載 二、位階・官職の記載 三、服解関係の記載 四、所生母の記載 五、賜氏姓の記載 六、好尚・趣味の記載 の六節に互って、諸種の事柄を指摘してきたが、それらを総括して稿を閉じたく思う。

先ず、一に関して、薨卒当事者の所生子の名を挙げ、あるいは、その事績に言及する事例は、五国史中、本書に最も多いこと。しかも、その記載する所生子の員数をば、薨卒当事者の位階が三位以上の場合三名以上、四位以下の場合一名のみを記す、といった原則が設けられていて、それに基拠して記載されているとみられる節があること。斯うしたことに多少現われているように、件の所生子の記載を含む薨卒記事全般への本書編纂事業の「主導的役割者」の影

響度、換言すれば、当該記事全体への「主導的役割者」の個人的な意志・意向の反映という点で、本書は他余の四国史に比して極めて稀薄・淡泊だと言えること。

次に二に関して、本書は五国史の当該記載中、A型（官位＋官職＋人名）、C型（官職＋官位＋官職＋人名）両形式を採用に最も徹底していること。これは、同書の「行」「守」両文字使用の卓抜さにも端的に示されており、このうち「行」は、同書において該字の使用さるべきA・C両型式事例のすべてに見受けられる程の徹底さである。これを要するに、一薨卒記事として載録すべき、その薨卒当事者たる某男性官人については、凡そ、散位者でない限り、その所帯官職を努めて記載せんとし、且つそれが徹底して為しえられていると言えること。

次に三に関して、本書は五国史中、件の記事を最も多く有し、しかも、服解から服闋後の官職への復帰までの期間についても詳細である点、他余の四国史の比でないこと。これは、薨卒当事者の官歴の係年月記載の詳細さを示すものであり、また、薨卒当事者が外官に補任されても、実際の攸、任地に赴かぬ旨を記す「不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>（任）官」や「不<sub>二</sub>肯<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>」任」なる事例の豊富なことと相俟って、官人の動向・動静の一斑を如実に示すものでもある。

尚、某官人の服喪期間中だけに限り、その職務を全うすべく、仮令、一時的であるにもせよ、当該官職に他者が補任されたことを示す明証は見出されない。これは、独り薨卒記事についてのみならず、他余の任官ないしそれに関わる記事などについても、同様に言えることである。

次に四に関して、薨卒当事者の生母名を記すに、その薨卒当事者は皇（太）子・皇女・（内）親王の場合が殆どである。そして、有生母名記事合計数の皇（太）子・皇女・（内）親王薨去記事合計数に占める百分比、さらに、有生母名記事合計数の薨卒記事合計数に占める百分比を、各五国史毎に算出してみると、それらの孰れもが、『三代実録』において最高値をマークしていることが知られる。仍って、五国史所見の薨卒記事中、『三代実録』のそれが、薨卒当事者の



生母名を記載することにおいて最も卓越している、と言えるのである。

次に五に関して、薨卒記事における薨卒当事者の父祖ないし本人への賜氏姓年次が明確に示されている事例数の、薨卒記事合計数に占める百分比を、各五国史毎に検してみると、『三代実録』におけるそれが格段に高率をマークしていること、つまり、各五国史収載の薨卒記事にあって、薨卒当事者の父祖ないし本人への賜氏姓年次記載が最も卓越しているのは、『三代実録』のそれであることを指摘しうるのである。

最後に六に関して、薨卒記事における薨卒当事者の好尚・趣味に関わる記載記事中、特に「好」字を以て表現されているものの、薨卒記事合計数に占める百分比を、各五国史毎に検すると、『三代実録』のそれが最も高率を示していること。つまり、五国史所見の薨卒記事中、件の記載記事を最も多く有するのは、『三代実録』のそれであること。そして、その「好」字を以て表現されている好尚・趣味の記載記事をば、内容の上から文事・学芸に関わるもの(A)、武事・武芸に関わるもの(B)、芸能・雑芸・風流韻事に関わるもの(C)、その他(D)と分類し、そのうち、AとCの記事数の、AとDの記事数に占める百分比が、五国史中、飛び抜けて高いのは、『三代実録』のそれであること。AとCの事例数中、Aのその多さが注目されること。さらに、五国史所見の薨卒記事における五位の薨卒当事者中、その好尚・趣味を記載する「好」字使用の事例数において、最も卓越しているのは、『三代実録』のそれであること、などを指摘しうるのである。

これら一と六の記載に関して各々概述した処は、また、次のようにまとめることも出来よう。即ち一と六の記載に関して述べた事柄のうち、二・五・六では、薨卒当事者自身の所帯官位・官職、賜氏姓、好尚・趣味などを詳細に記し、そして、自余の一・三・四と上記の五のうち、一では、その所生子の名や事績などを録し、三・四では、薨卒当事者自身の官歴・事績の他、その所生母名、母系出自、その父母の帰幽などに触れ、さらに五では、父系出自は固より、それ

に関わる、いわば氏族志的な事柄にも言及している個処がかなり多く認められるというように、単に薨卒当事者の官歴・事績・為人（好尚・趣味・性格・特  
技など汎く含めたもの）についての記述に止まらず、その所生子や父母の名・事績、父母両系の出自、父母の帰寂などといった事柄をも幅広く併記している点で、『三代実録』の薨卒記事は、五国史の当該記事中、最も卓越している、と言えることである。

斯うした記載内容の詳細さと豊富さにおいて、『三代実録』の薨卒記事、延いては当該記事を内蔵する処の同書それ自体の性格ないし特色の一端を認知しうるのである。

（昭和六十一年八月九日成稿）